T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	015
発行日 / Pub. date	1998,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

ka015

Spring, 1998

Headline: TANIGUCHI Yoshiro

巻頭:**谷口作品探訪**

東京工業大学の教授・名誉教授であられた建築家・谷口吉郎(1904-1979)の展覧会が現在全国を巡回中です。
谷口作品の多くは、一見近代主義建築と無関係に思える日本の伝統的な意匠や空間構成の中に、合理性・機能性と美意識が分かち難く結びついた姿を見いだそうとしています。
これによって、合理性と美を対立させ、そのどちらかを上位に置くような図式を否定し、近代主義建築が普及していく過程で起こった通俗化に対しては常に批判的であり続けました。
特に藤村記念堂に代表されるような、建築自体はつつましくありながらも、外部空間や自然の要素と一体となって、
建築にとどまらないより大きな環境のまとまりを形成するあり方などは、今なお新しさを感じさせるものです。
建築のデザインを取りまく境界条件が劇的に変化している今日、当時にも増して学ぶべき内容がそこには含まれているのではないでしょうか。

今号では、この展覧会に呼応して、実際に谷口作品を学生が訪れ、若い目が捉えたその現在をレポートしています。
また、巻頭インタビューでは同展覧会の実行委員長である仙田満教授に、師・谷口吉郎のこと、展覧会のことなどを語っていただきました。
さらに、今号から始まる学生による書評でも、現代の学生から見た建築家・谷口吉郎像を浮き彫りにすべく、
谷口吉郎著『清らかな意匠』や、藤岡洋保教授の谷口論を取り上げています。

華[ka]春号

[巻頭記事]仙田先生インタビュー/谷口作品探訪/[97年度設計製図]/[特別寄稿]/
[ニュース・投稿]ワークショップ・レポート:日米学生交流模型作りワークショップ/世界の建築教育:ロンドン大学バートレット校に留学して/
コンペ応募案/書評:「身の回りの小さな意匠」「中庸への意志」/OB卒業設計再見:歴史主義から近代主義へ

巻頭記事：仙田満先生インタビュー

Headline: Interview with Professor Senda

インタビュアー：米津正臣[修士2年] 笠井誉仁[修士2年]

Interviewer: YONEZU Masaomi (M2), KASAI Takanori (M2)

Q――先生が、実行委員会の幹事として開催されました谷口吉郎東京展を終えられてのご感想をまずお聞かせ下さい。

A――私は、実行委員会の幹事として、全体のコーディネーションをやらせて頂いたのです。これはTIT設計教育委員会をはじめ、東工大のOBの方々の支援によって実現したものです。みなさんのお陰で非常に立派な展覧会になったと思っております。谷口吉郎先生というのは、ある意味で東京工業大学のデザイン系の源流なんです。清家清先生は谷口先生の最初のお弟子さんです。そして篠原一男先生、それから坂本先生、八木先生とか私とかですね。東京工業大学出身の建築家のほとんどは、その元をたぐると谷口吉郎先生なのです。そういった意味でこの展覧会を企画した訳です。

Q――仙田先生としてのこの展覧会の意図のようなこと、伝えたかったことは何でしょうか。

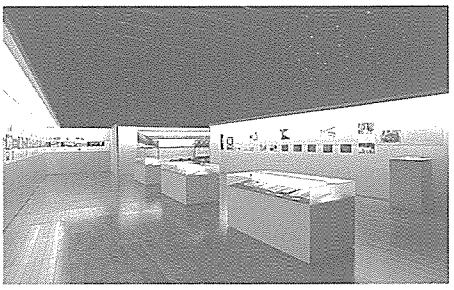
A――なぜ今谷口吉郎の展覧会をやるのかという事についていいますと、谷口先生の意匠というのは、先生の同世代の建築家である前川國男さんや丹下健三さんに比べると、ある意味では非常に地味だったと思うのです。水力実験棟など、戦前にモダンな建築を建てられましたが、そういうものから比較的早い時期に、日本の伝統的な所に回帰していきますよね。それが藤村記念堂なんだけれども、その背景には、文学者や美術家など他分野の方々との交流や、もともと先生が金沢の九谷焼の旧家のご出身であることなどが考えられると思います。先生のデザインは、「清らかな意匠」とご自身でいわれているように、とても簡素で、また環境というものを考え、様々な地域、歴史なりの文脈を捉えて提出するという方法を早くからとられたデザインだと思うのです。バブルがはじけ、人間というのはもう少しシンプルに生きるべきではないかと思える現代において、先生の「清らかな意匠」というのを見直そうじゃないかと、そう言う意図もあったと思います。

Q――谷口研に在籍されていた頃の仙田先生の谷口吉郎先生の印象はどのようなものでしたか。

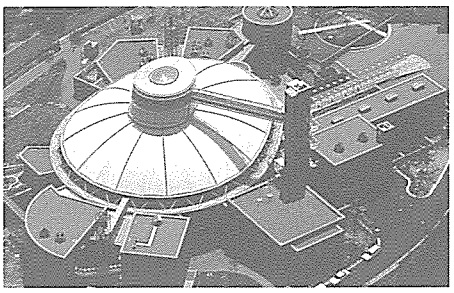
A――当時、私が4年生の時は谷口先生が教授で退官直前、清家先生がおられて篠原先生が助教授になりたてといった時代でした。清家先生はまだ若くて、研究室もなごやかな感じでやっていました。一方、谷口先生のところはすごく権威的なんですよ、私は先生とは直接研究室で2、3回しかお話したことがなかった。先生と学生の部屋は分かれていて、助手でも直立不動でドアをコンコンとたたいて「入っていいですか」といって入る。大変なんですよ。でも研究でもなんでも、ああしろこうしろとおっしゃらないし、何でも自由にやらせてくれました。先生の部屋はこわいのだけれど、研究室は自由な雰囲気でしたね。私はそこで、歴史的空間論、具体的には城と茶室の研究をやりました。

Q――先生の作品と谷口先生の建築作品との関係、つまり谷口先生からの影響をどのようにお考えですか。

A――私が谷口先生から受けた影響は幅広い分野に挑戦するというところですね。先生は建築だけではなく、墓碑をたくさんつくっています。それまで墓碑というものは建築の仕事として考えられていなかったかもしれない。けれど墓碑の多くは自然景観の中に、象徴的なものをぽんと置かなくてはならない。いわば、そこにある種の空間を作ってゆくわけなんです。私は大学を出てから、菊竹清訓先生の下で色々な仕事をしたのだけれども、おまえは谷口研だったからということで、墓碑を担当させられたこともありました。それはなかなか苦労しましたね。だけどもそういう点で谷口先生の幅の広さというものに、私は非常に影響を受けていると思いますね。私が独立したとき、小さな住宅の設計と併せて遊具の設計を始めるんですが、それまで建築家が遊具という物を設計している例はなかったと思います。けれどもそのような領域にも積極的に関わってゆき、また逆にそれから建築にとって返す。あるいは建築とランドスケープとの関係とか、そのような広がりというものに先生の影響はあるのではないかとは思います。



谷口吉郎展東京会場風景



愛知県児童総合センター

Q――そういえば、今年(1997年)作品賞をとられた「愛知県児童総合センター」は、以前の作品と比べ、遊具と建築の境界が曖昧になっている印象を受けました。特にそのような意識はあったのでしょうか。

A――今回の作品は規模が大きいけれど考え方とか作り方は今まで30年間やってきた事と共通しているんです。私にとっては遊具も建築も区別はあまりないのです。ただ最近、遊具もだんだん建築よりの遊具になってきて、また建築が遊具化しているというところで、遊具と建築の境がなくなってきているとは言えます。

私は子供の行動観察を通して、本来の人間の「動き」のようなものが理解し易くなると考えています。大人というのは理性でカバーしてしまう部分があるわけで、頭の中で行動を決めてしまう部分があるのです。図書室は本があれば回路という空間は成立する。ところが子供の遊びの場合には「ここが遊ぶ空間です」といっても遊ぶための空間的しつらえなり、そういった空間が読みとれない子供は遊ばない。遊びが展開していかないんです。子供の空間での振る舞いは大人と違って、ある意味では感覚的で生理的な部分と関係しているところがあると思います。そういう意味で子供の行動、あるいはその空間の研究は、大人の空間に適用できる潜在的な部分があるのではないのかと考えています。どう心を開放する空間を作ってゆくかという点では、子供の行動研究というのは非常に大きな内容をもつものだと思っています。今後も、子供の行動の研究とその応用としての設計は私の中心的なテーマでありつづけると思います。

[1997.10.27.仙田研究室にて]

巻頭記事：**谷口作品探訪**

Headline: Reports of Yoshiro Taniguchi's works now

水力実験棟および70周年記念講堂
——東工大キャンパスの谷口作品

Water power labolatory and T.I.T. 70th aniversary hall:
Taniguchi's works at T.I.T. campas

川上正倫［修士2年］
KAWAKAMI Masamichi (M2)

東工大キャンパス内にある水力実験棟および70周年記念講堂は、我々がもっとも身近に触れることができる谷口作品である。

「わけもなく嬉しい」と谷口が喜んだ処女作である水力棟は、1983年の改修に伴いサッシュがスチールからアルミに換えられた。見付厚さが増えただけでなく、取り付け位置が当初より60mm程度外側に移動したため、立面の彫りは浅くなり、プロポーションや透明度も何となく損なわれた感じで残念である。西側ファサードは、今は第一食堂に邪魔されて見ることはできない。斜面を利用して水路がプールまで延びていた当時の配置は、グラウンドから見上げればさぞダイナミックで美しいものだったろう。今は、米松の大木に隠れて人々が視線をとまらせることも少なくなっているが、インターナショナル・スタイルのこの白い建物は、塗装し直され現在も使われており、多少乱雑に実験器具が置かれているものの、内部はほぼ原形をとどめている。一階と二階にまたがる縦長の窓は、実験室に十分な採光をもたらすだけでなく、二階スラブを壁面から浮遊させている。この水力棟の窓の垂直性もコンクリートゆえという構造的合理性からなのだろうか。南側の窓のついている梁が表面より少し内側についているが、このような一見構造的に不合理な意匠的操作が逆に建物全体の構造的合理性を表現しているようにも見える。二階部分のスラブにあがると室内を一望でき、「見る　見られる」ような関係が成立していることがわかる。この劇場的な構成と、縦長の大開口のためか実験室はとても開放的である。この他、階段を降りて行くとちょうど地面が見えるように開けられた窓、西側玄関の一段目だけが丸い階段、丸い穴に梯子が貫通している庇など、至る所に実験工場らしからぬ細かな意匠的配慮を見出すことができる。螺旋階段を上り、屋上に出ると東急線越しに遠く富士山が望まれる。かつては、内部の縦長の窓からもこの景色が見えたのだろうか。シルエットに富士山をいただき、夕日が水力棟を映し出していた頃を考えると、時代に伴う周辺環境の変化を感じずにはいられない。大学施設としても周囲の実験工場が無くなったおかげで、この建物だけ孤立している印象も受ける。東京都の歴史的文化財に指定されているので、一応保存への道筋はついているが、保存の為にエアコンの取り付けもままならないというような話を聞くと、現実の制度のなかでの建物の保存というのは、また少しおかしな話になっているのかなと考えさせられる。二階のバルコニーより眺めていると、博物館や製図室、あるいはカフェ、食堂にしても気持ちいいのでは、と様々な利用方法を思い描ける。これも本来の実験室という機能を超えた魅力がこの建物に備わっている証拠であると思う。

水力棟の向かいに立つ70周年記念講堂（上写真）は、一見、同一作家の作品とは思えない。コンクリート打ち放し、側面のジグザグの縦長連続窓など、水力棟と比較して作家としての手法に変化が見られる。ヴォールト屋根や煙突、縦長のスチール枠窓などは秩父セメント工場に近い。ただし、脇の桜並木の坂に対して大小のヴォリュームを分節化している点には、水力棟との対応が感じられる。桜並木側からの立面は、掲示板の設置や銀杏の成長によって竣工当時と比べると半分近くが隠されている。谷口作品としても水力棟の名に押されて影が薄いようだが、この記念講堂も水力棟に負けない魅力を放っていると思う。並木側からのレベルにあわせて、ヴォリュームは浮遊感を漂わせながらスロープに突き出し、これに対してホール客席はスロープに沿って傾けられているので、客席側面から浮遊するヴォリュームをくぐるようにスロープ側に直接出ることができる。内部のうねった屋根や、オーギュスト・ペレのノートルダム・デュ・ランシー教会を彷彿とさせる窓にはめられた飾り格子は美しいものである。但し、座席の間隔だけは狭すぎて長時間座っているには耐え難いものがある。学部の講義に利用したり、サークル活動に利用したりと、水力棟よりも一般学生には親しみ深いだろうが、学生数も計画当時とは大分変わってきてしまっているし、利用目的に合わなくなってきていることは確かだろう。しかし、この講堂と水力棟、及びその周りの桜並木の坂道やスロープといった、谷口吉郎が関わることによって東工大につくりあげられた場は、さながらスラムクリアランスのように高層化されていく構内のどんな新しい建物よりもとにかく美しいわけだから、いつまでも魅力を保ち続けられるよう大事にされることを願いたい。

藤村記念堂――環境と一体になった建築

Shimazaki Toson Memorial hall: The architecture united with landscape

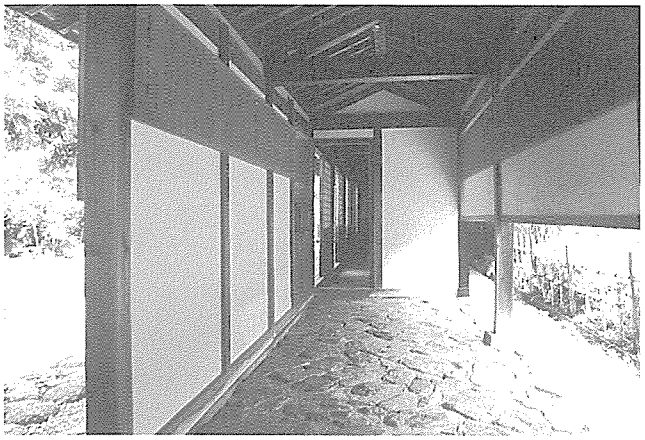
谷川大輔［修士2年］
TANIKAWA Daisuke (M2)

旧中仙道に沿った小さな村『馬篭（まごめ）』に、小説『夜明け前』で有名な島崎藤村の生家『本陣屋敷』はあった。生家は明治29年の火事で焼失したが、昭和18年の藤村の死の直後、地元民が自発的に記念事業を計画し、詩人・野田宇太郎を介して谷口吉郎に記念堂の設計が依頼された。敗戦直後ということで資材もなく、地元民が総出で地場の材料で作り上げたことでも知られており、第一回日本建築学会賞を受賞している。当初その生家の復元も検討されていたようであるが、谷口は礎石だけが残る生家の焼け跡に砂を敷くだけにし、敷地の端に記念堂を新築したのであった。旧中仙道に面した記念堂の入り口である黒い冠木門の先には、白い漆喰塗りの土塀が障壁（視線を遮る壁）としてたつ。赤い額が掛けられたこの障壁によって記念堂全体や本陣跡の庭をすぐには見ることはできない。この土塀の左手には、梅の老樹が枝を広く垂れているため、来訪者は自然と右回りの動線を選ぶ。冠木門の外から写した古い写真では、この梅の木の影が白い土塀に落ちるようになっている。土塀は庭を囲い込み視線を遮るだけでなく、木や人の影を写し込むスクリーンとしての役割も担っているのだ。

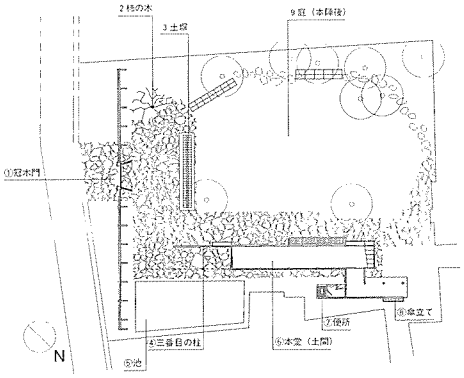
土塀の右手には玄関があり、記念堂の立面の一部を見ることができる。本堂は真壁造なのだが、右から三番目の柱の庭側だけが漆喰で塗り込められ、横長の長方形の白い面を作り出している。配置図を見ると、土塀の軸線がこの面の真ん中あたりとぶつかるように配置されている。この面は立面のプロポーションを整えるためという説もあるが、それにもまして、谷口はこの白い壁と土塀でできる「白い外部空間」を作りたかったように私には思える。

この「白い外部空間」から垣間みえる池に誘われる様に玄関に入るのだが、いざ内部に入ると腰から上の壁によって池を見ることはできない。池は北東の柔らかい拡散光を内部に導き、その気配を感じさせるだけだ。冠木門から玄関内部まで花崗岩が敷き詰められ旧中仙道との連続が表現されているのだが、玄関の奥の狭い舞良戸を開けて本堂に入るとそこは「土間」である。谷口は、通常外部空間と内部空間の中間領域として表現される土間をここにもってくることによって、本堂を中間領域として定義し本堂と庭との関係をより強めているのである。堂内の幅は7尺で人がようやくすれ違えるほどなのだが、それに対して奥行きは7間半と奥深く、その奥の正面の壁には藤村の像がおかれ、脇の下地窓からの光によって照らしだされる。その像に向かって左手に並べられた8枚の障子は手前の4枚は敷居まであるが、奥の4枚は腰掛け窓になっている。低い天井に垂木を繁くいれてあらわにし、その細かいリズムと次第に背が低くなっていく開口部によって奥行きが強調されている。これが谷口自身が藤村の作品の独特の「暗さ」を表現しようとした設計意図の現れと考えてよいだろう。しかし、各障子の「障子紙の面積」は同じなので実際に光のグラデーションを付けるには障子を開けた状態にしなければならない。谷口は開口部を開け、壁に沿った腰掛けに座って外を眺めることによって堂内を庭の一部に組み込んだ状態にすることを意図したのではないだろうか。

生家の礎石が残る庭から記念堂を見る



玄関内部、右手に池が見える



配置図

また、完成時には出口に傘が用意されていた。雨が降った日や日照りの強い日には傘をさして庭をめぐったそうだ。つまり庭を囲い込むように設定された動線のうち、屋根が架かっていない庭では自分で傘＝屋根を持ってめぐるのだ。さらに、土塀と記念堂が離れていること、記念堂を出て庭をめぐる動線の半分は外部空間で庭越しに建築を見ることを含めて考えると、記念堂をただ単に庭を囲い込む壁としてのみ作ろうとしたのではなく、建築の持つヴォリュームにも意味を込めていたと考えられる。谷口は、記念堂の細長いヴォリュームを境界に置くことによって敷地全体を規定しようとしたのだ。記念堂内からは建築を介した庭の存在を、また外部空間では庭を介して建築の存在を規定するような相互定義性を持つ環境を生み出そうとしたのである。便所と出口の土間のヴォリュームを主室から切りはなし、主室のヴォリュームを純粋に意匠的なものとして庭に押し出していることがその証である。

この藤村記念堂を、完成の後に現れる「新日本調」の流行の先駆けと見る説もあるが、私は環境と一体になった建築の作り方の最も完成されたものとして再注目するべきだと考えている。

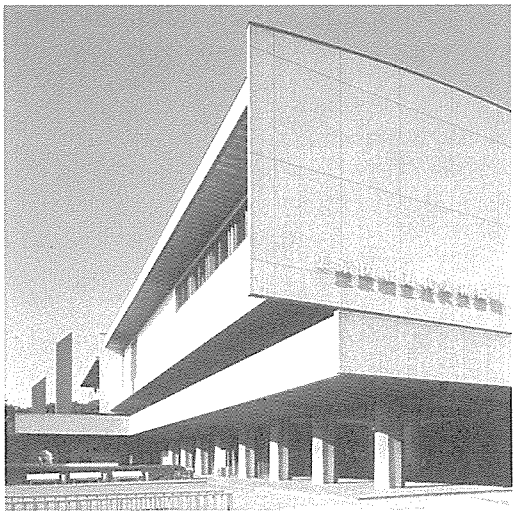
東京国立近代美術館——「日本の近代美術館の標準型」

Tokyo national museum for modern art: Japanese standard of a museum for modern art

浦橋信一郎[修士2年] 久圭介[修士2年]
URAHASHI Shinichiro (M2), HISA Keisuke (M2)

東正面に江戸城をのぞむ北の丸公園内に、明治以後の日本の近代美術を収蔵するこの美術館は建っている(写真下左)。その開口の少ない外観は背後に高速道路がせまってることもあり、まるで倉庫のようである。しかしその寡黙なたたずまいとは逆に、エントランスに足を踏み入れると、木を主体としたこじんまりした温かみのあるホールが出迎えてくれる。谷口は設計主旨のなかで「日本の新しい創造に対して、この建物が活発な造形活動の場となることを願い、まず技術的には、外界からの空気汚染と騒音を防ぎ、館内の照明、温度、湿度の調節に注意を払った」と述べている。建築家であると同時に技術者であることを常に意識し、形骸化したモダニズムに対する批評としての「合目的性」を主張した谷口らしい発言である。当時としてはおそらく先鋭的な考え方であったに違いない。そうした先見性は単に技術の問題だけでなく美術を展示するという施設のあり方に対する提案にも感じられる。「新しい形式の美術が要求する立体性と規模の拡大に対して、壁面のほかに、室内空間の高低を考慮して、新しい視角による鑑賞を重視した」と説明にあるように、展示室を巡りながら少しずつ上ってゆくスキップフロアの大階段は開放的で、あらゆる角度から作品を見ることができる。また各展示室はフレキシブルでありながら、各々独自の特徴を持った空間となっている。

完成してからもうすぐ三十年が経とうとしているこの美術館はホール隅の小さな売店、飾り気のない展示室、最上階のひっそりとした休憩室などに顕われているように、とてもシンプルで、カフェや様々なグッズを売るミュージアムショップまでが複合されたアミューズメント性の高い、美術館そのものを楽しんでしまう現在の形式に慣れてしまっている私たちには物足りなくないこともない。しかし、谷口の「建築家の仕事は、ここでは舞台をつくることにある」という言葉が端的に示すように、美術館は展示される作品が主役であり、建物は脇役であるという彼の主張は、展示される作品以上に建築が自己主張する現代の美術館に対する戒めのようにも受け取られ、あらためて「良い美術館とは何か？」ということを考えさせられる。



秩父セメント第二工場——「開放系としての建築」

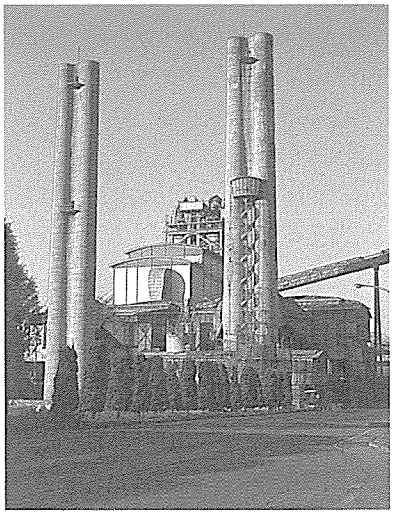
Chichibu cement company factory No.2: Architecture as "open system"

小野田環[修士2年] 山口由美子[修士2年]
ONODA Tamaki (M2), YAMAGUCHI Yumiko (M2)

秩父セメント第二工場は1956年、当時の最新鋭の技術をもつ工場として建設された。産業の発展による近代化が目指されていた時代に、セメント工場(写真下右)は社会の生産構造を支える、ある意味で縁の下の力持ちともいえる重要な施設であった。キャリア全体を通して文化的な建物や宮廷関係の建物に携わることが多かったが、同時にこのような工場の設計にも関わったことが、谷口の幅の広さを物語っている。

谷口は内部用途の異なる各施設に、個別の形を与えるのではなく、一様によく統一された意匠表現を与えている。工場全体はオフィス、制御棟、材料保管庫、巨大な機械棟など異なる施設による分棟配置であるが、それら建物群には空隙レンガ、あずき色のスチール・サッシュ、スレートをはめたカーテンウォール、ヴォールト屋根といった共通の外観表現をもたせている。ここでは建物内部に収められるものが、人間、機械、石灰石の何であれ、すべて同様のデザインヴォキャブラリーによるシェルターで覆われている。つまり谷口は工場という産業構築物に対して、建築的な表現を与えることによって、工場を「建築化」したと言えるだろう。このことは、例えばル・コルビュジエや未来派の建築が工場や機械のあり方に触発されて新しい時代の構成の美学を確立しようとしたこと、つまり建築を「工場化、機械化」しようとしたこととはアプローチが異なるものの、結果的には彼らが目指したのと同様な近代特有の表現による即物的な空間を成立させている。

しかし、それ以上に興味をもったのは、敷地中央に配された資材置き場の原材料、鉄道、道路、用水といった建築とは言えないような要素を建物内に引き込み、材料を搬入し製品を搬出するまでの一連の動きをスムーズにつなぎ合わせた構成である。このような構成は一つの完結した世界をつくりあげるのではなく、外部に開かれた大きなシステムの一部を担うこの建築あり方をよくあらわしている。それは藤村記念堂にも共通して見られるように、周囲の環境をつくり上げている要素との関係までも含めて建築の構成として捉えようとする考え方のあらわれといえ、都市化が進んだ環境の中で建築をつくらざるを得ない現代建築の問題意識にも通ずる新鮮さがあると思う。

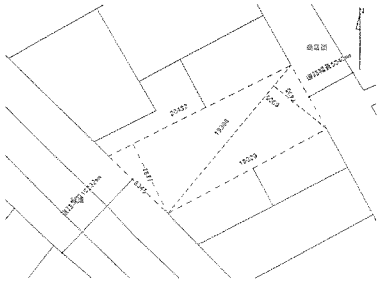


1997年度設計製図第一「都市部の住宅」

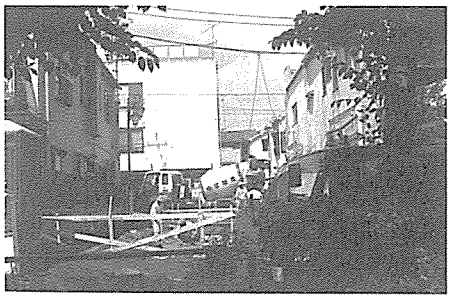
Sophomore-studio work "House in the city": Spring semester

担当：
八木幸二[教授] 藤岡洋保[教授] 宮本文人[助教授]
奥山信一[助教授] 塚本由晴[講師]
YAGI Koji (Professor), FUJIOKA Hiroyasu (Professor), MIYAMOTO Fumihito (Associate Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer)

建築家とその他3人のための住宅を設計してください。それは一つの家族であっても、友人どうしであっても、兄弟姉妹であっても、2世帯であっても構いません。また、設計のアトリエや店舗を併設しても構いません。自分の数年後を思い描いて、それにぴったりする住宅を考えるのも良いでしょう。敷地は緑が丘商店街と緑道に挟まれていて、2つの通りの間には60cmのレベル差があります。緑道側は桜並木に面し日当りが良い反面、大井町線の騒音にさらされ、商店街側は電車の代わりに人通りにさらされます。住宅も都市の環境を形成する重要な要素の一つですから、商店街の連続について考えることもできるでしょう。このように、そこでの暮らし方や、多様な特徴を持った敷地への現われ方などの様々な側面を検討し、住宅の空間を組み立ててください。1997年の空気をよく吸った提案を期待しています。



設計条件：
4人で住むための住宅。
店舗などの住宅以外の機能を積極的に導入すること(自営、賃貸いずれも可)。
敷地周辺の地盤レベルは、緑道側に対して商店街側が約60cm上がっている。
建物規模：原則として地上3階、地下室も可。下記の法的制限を守ること。
敷地面積：147.6m²
用途地域：近隣商業地域
建蔽率(建築面積の敷地面積に対する割合)：80%最大118.1m²
容積率(延べ床面積の敷地面積に対する割合)：200%最大295.2m²
高度地区：第2種高度地区
高度斜線：h=5mから1:1.25、敷地境界線から水平に8mの位置から1:0.6
道路斜線：1:1.5
隣地斜線：h=30mから1:2.5
構造：自由
提出図面：配置図(1階平面図を兼ねる)1/50、各階平面図 1/50、断面図(1面以上)、1/50、立面図(1面以上)1/50、矩計図 1/20、アイソメトリック図(設計意図を最も明快に表現できる図とすること)、内観パース(点景を数点)、設計主旨(箇条書きとすること)
建物名、各自の設計主旨を明確に表現したタイトルを付けること。
その他、設計意図を表すのに必要と思われる図面を各自追加しても良い。
図面レイアウトはA1(594×841)横使いを3枚とする。
作図はインキング、コピー・張り込み等は禁止、文字は日本語とする。



緑道から商店街を見る。

講評会レポート

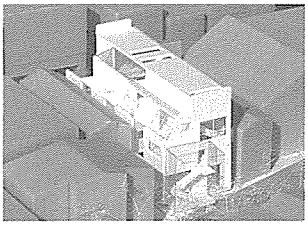
Report of jury

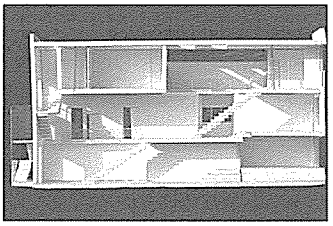
増山絵理奈[修士2年] 米津正臣[修士2年] 笠井誉仁[修士2年]
MASHIYAMA Erina (M2), YONEZU Masaomi (M2), KASAI Takanori (M2)

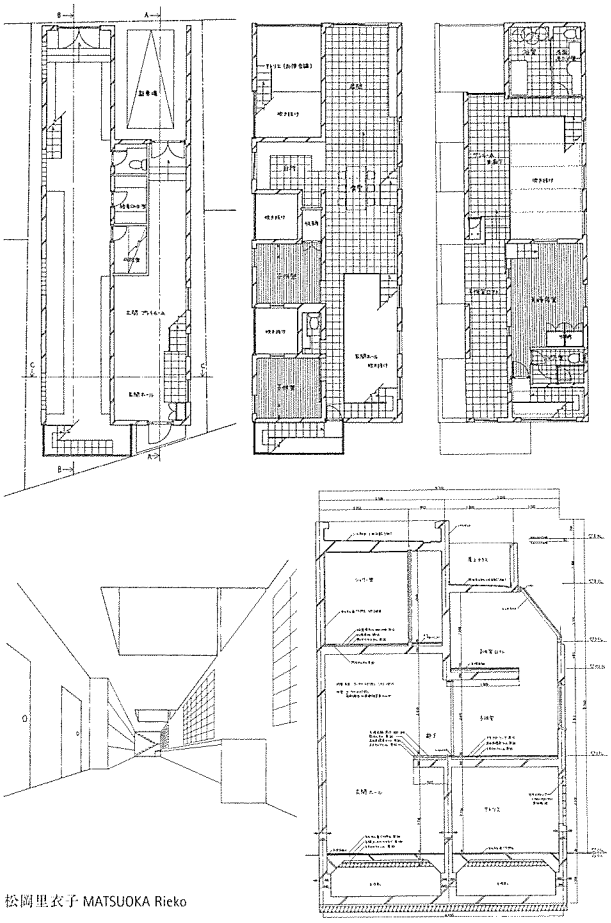
この課題は、建築家と他3人のための住宅を、マンション・アパートや商店が住宅街に混在して形成された大学周辺の高密な都市環境の中で計画するものであった。そして都市部にあって、住人は必ずしも家族でなくてもよく、住宅以外の機能を付加するなど、戸建て住宅とは何かを改めて考え直す契機となる設定がいくつかされていた。敷地は、南側では自由が丘に続く緑道、北側では緑が丘商店街に面しており、この2つの性格の異なる通りとの対応によって、その建物の性格を規定したり、またそのことによって周辺環境の中で何が重要か、を示すことができる場所である。例えば、隣地のイタリアンレストランは緑道沿いに入口を設けることで自由が丘に所属していることを示し、その隣の酒屋は商店街と緑道の両方に入口を設けて2つの道を連絡し、また、居酒屋は商店街に面した入口を設けることで緑が丘商店街への参加を示す、といった具合だ。同様に、電車や賑わいの騒音、車、緑道の並木などの様々な要素との関係から建物の性格を決めることもできるかもしれない。「都市部の住宅」というタイトルが示すように、都市と一体となって環境を形成する住宅を設計することが求められたのである。2年生達はどのような可能性を見せてくれたのだろうか。(誌面の都合上、先生方は敬称略とさせて頂きます。また、発言の文責は筆者にあります。)

敷地が細長いことに注目し長手方向に平面を分割する案。

[松岡]——これは建築家の住宅です。階段で、吹き抜けの中を上って行けるようにしていて、2階にある会議室で施主と打ち合わせします。子供室には専用のロフトがついていて、上の階で連続し、寝室からも事務所へ直接階段で行けます。

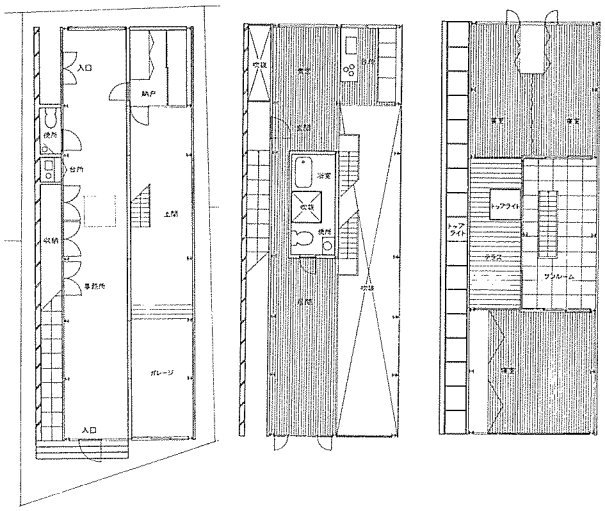






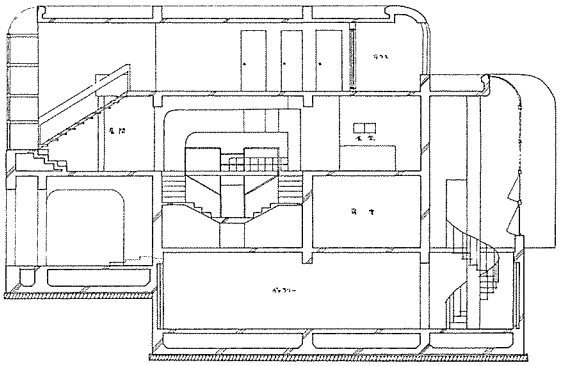
松岡里衣子 MATSUOKA Rieko

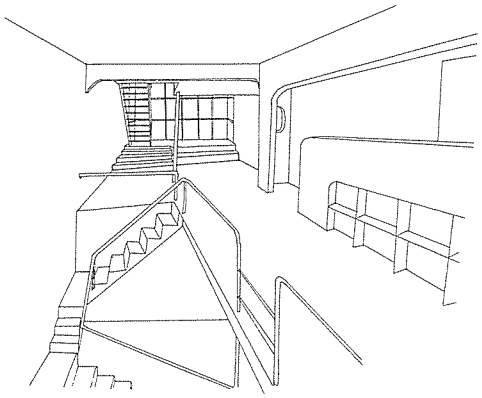
奥山：主寝室隣の子供室ロフトの幅は狭く見えるけれど、スケールは？
松岡：2mです。
奥山：窓もトップライトもたくさんあって、両方とも効果が薄れるよ。
八木：考えても上手くプレゼンできなかったタイプの人なのかな。
でも、スケールを含めてよく設計している。
塚本：階段がたくさんあっていろんな所がつながっているのがいい所なのだろうけれど、もっと整理して数を減らしても成立すると思うよ。
[横山]——細長い敷地の特徴を生かそうと思い、縦に分割しました。緑道側のエントランスから緩やかな階段を上っていくと、逆側に視界が開けるようにしました。プライベートと仕事場は明確に分けました。



横山志穂 YOKOYAMA Shiho

奥山：駐車スペースは内部なの？ スケールがおかしい。
あと、これでは風呂場のトップライトが小さすぎて、表現にならないね。
藤岡：破綻してそうで、以外とうまくいっている。
奥山：開放的な住宅。君は幸せな人間関係を想定していると思う。
塚本：建築で定義できない部分を、人間関係で補おうとしているのかな？
空間には緊張感があって、良質なモダニズムの住宅を想わせるね。
[五十畑]——この建物は3種類の空間からできています。1つは商店街側から入る地下ギャラリー、もう1つは北側の水回りが入った細長い小さなハコ、最後は南側の日常生活の大部分をしめる大きなハコです。建物の頂点が丸くなっているのは、環境に馴染むと思ったからです。

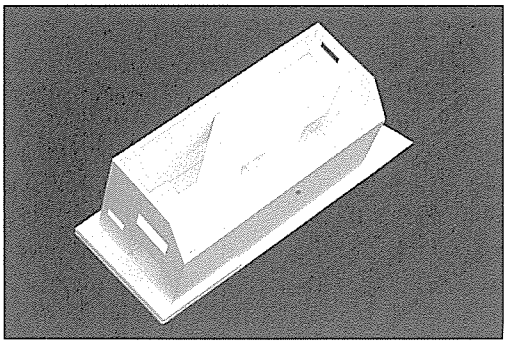


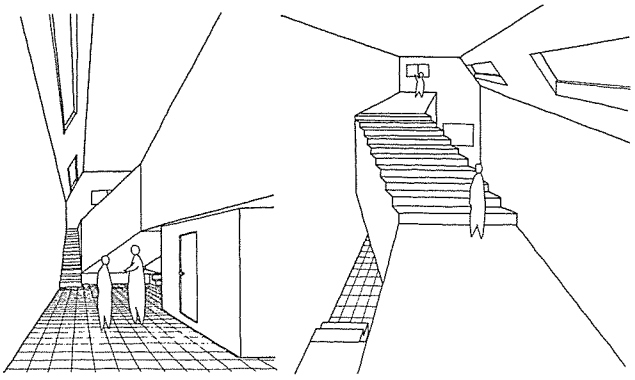


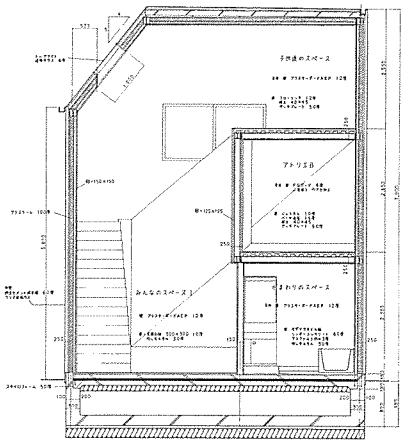
五十畑徹 ISOHATA Toru

塚本：でも、周りの他の建物は四角だから、かえって目立つとは思わない？ 環境に馴染むというよりは、分離派のような印象を受ける。
奥山：地下ギャラリーは、道からは見えそうにないなぁ。
これら長手方向に平面を分割した形式は、商店街と緑道の両方に面するという細長い敷地の形状を、住宅の内部空間に反映させようとしたものだろう。仕事場を含む大きな部屋に小さな部屋を入れ子状に浮かせたり、機能の異なる細長い箱を組み合わせたり、住宅の覆いの中に仕事場のヴォリュームを貫通させたり、と結果は違うが、考え方は近い。

このような長手方向への分割を2本のチューブによる入れ子の構成に置き換えた案。
[長谷川]——長さを表現するためにアトリエのチューブを入れ子状に貫通させ、床や壁といった従来の構成要素ではなく、チューブによって住宅の領域を分節することを試みました。







長谷川豪 HASEGAWA Go

奥山：チューブの中の2階の床が傾いてるのは何故？アトリエでしょう？

長谷川：せめぎ合う感じを出したかった。

奥山：それは自己満足だ。機能的なことをまず満たさないと。

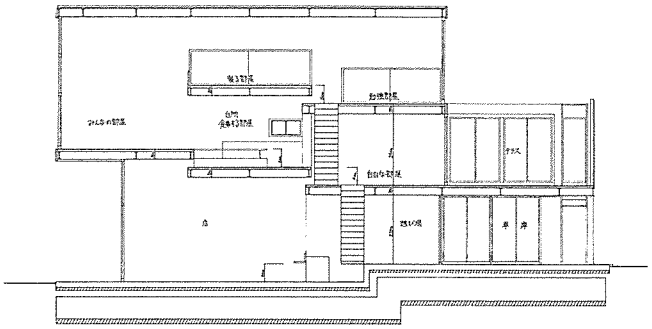
藤岡：空間構成は面白いが、ファサードに平凡な窓を付けたのは何故？

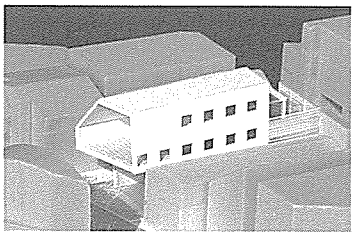
長谷川：普通の家にチューブが入っているように見せたかった。

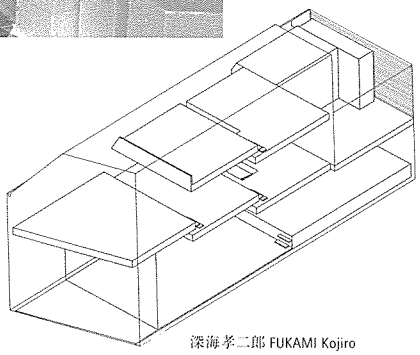
塚本：こまごましがちな住宅の空間を殻とチューブでシンプルに切り分けるという発想はいいけれど、階段やコアがついたり、普通の窓があったりすることで煩雑になっていると思う。細部にまで、責任をもとう。

敷地のもう1つの特徴である、わずかな高低差に注目した案。

[深海]――敷地の60cmのレベル差を生かして設計しました。壁はなく、60cmの段差で部屋を分けつつ連続させました。1階緑道側はカフェになっています。







深海孝二郎 FUKAMI Kojiro

藤岡：壁がないので、商店街から緑道に視線が通る点はいい。

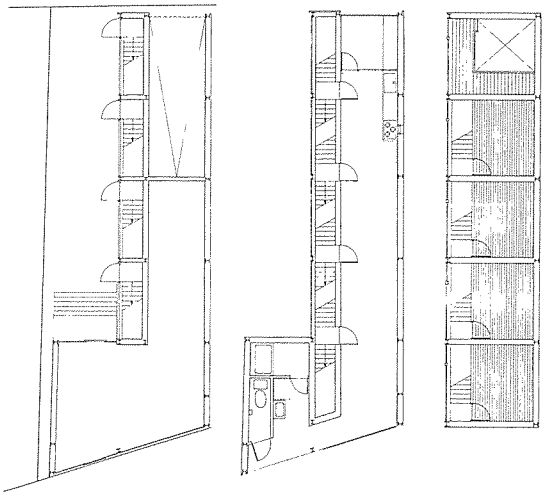
奥山：だけど階段と、床の上がり方向が直交しているのが気になる。これでは階段が付加的な要素に見える。床の模型表現も凡庸だ。

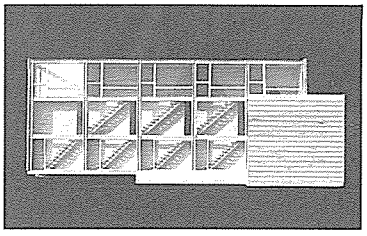
八木：でも、細部までよく考えられているね。

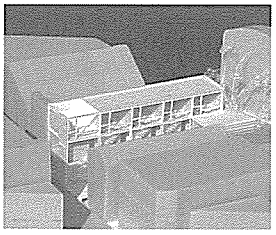
塚本：2階が商店街側でセットバックしてテラスができ、その分だけ緑道側に迫り出しているのはいいけれど、1階のカフェは楽しそうじゃないね。もっと使い方にも、周辺との対応からつくられた今の形を生かした方がいい。

このような周辺環境との対応よりも、そこでの住み方からアプローチしたものとして、4人が住むという条件を、特定の家族ではなく、血のつながりのない4人と想定して、個室の反復というかたちで全体をまとめた案。

[村上]――コモンスペースを通らずに、別々に個室にアプローチできるように、隣地との間を大きく取って、そこに4つの階段を配しました。1階緑道側に設けたコンビニエンスストアはそこからも入ることができます。







村上修平 MURAKAMI Shuhei

藤岡：オープンスペース側のエレベーションがやりたかったから、引きをとっただけのように見える。

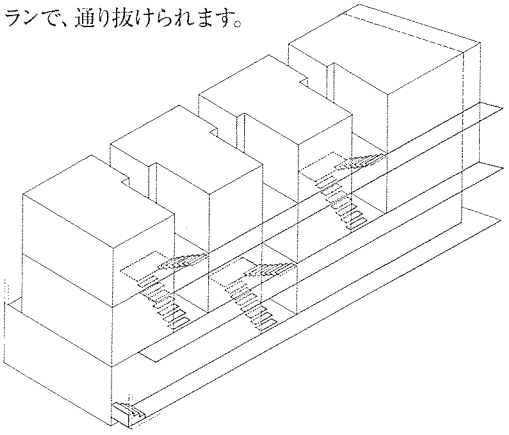
村上：個室が外部に面するようにしたかったのです。

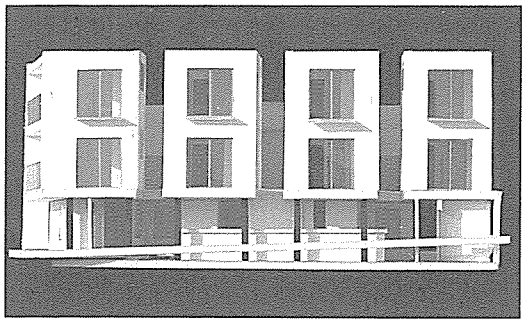
八木：階段幅を取りすぎなのではないか。コモンスペースが狭すぎる。

村上：違う4人がバラバラに住むことにこだわってしまいました。

塚本：住み方の設定にはもう一つ説得力がないけれど、模型表現はきれいで造形的な説得力がある。

[内山]――賃貸物件を設計しました。8コの部屋があり、一人が2つ借りてもよく、いろいろな住み方ができるようになってます。1階はレストランで、通り抜けられます。





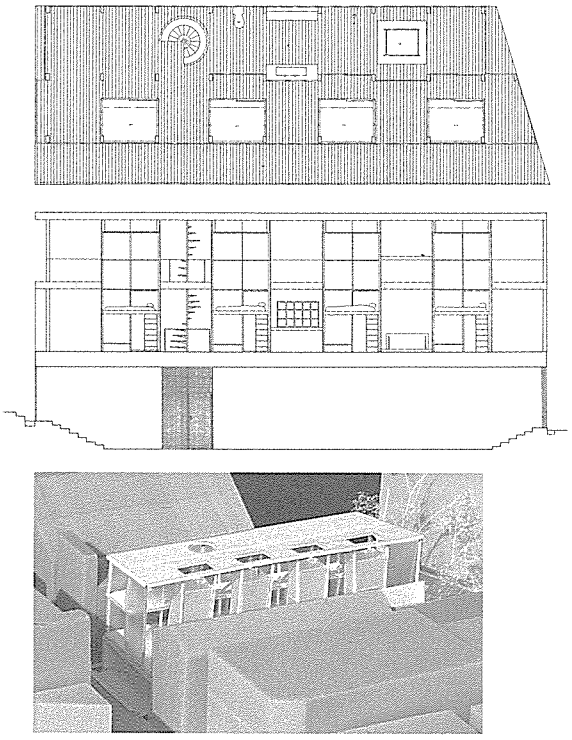
内山森 UCHIYAMA Shin

藤岡：何故、2×4なのか？それから個室間の隙間を開けた理由は？

内山：隣の音が直接聞こえないようにしたかったのですが、ガラスを使って気配は感じられるようにしています。

塚本：アパートの形式を使って住宅の空間を再定義するという試みがうまくいっているかどうかはともかく、設計をある種のゲームにしようという感覚はわからないでもない。だけど、その考えの中に構造形式をどうするかということが入っていないのが残念。

[加納]——1階がギャラリーで、2階以上は特定の人だけが行けるようにしました。それは自己が確立した、互いに干渉し合わない人々で、ここでは身も心も裸で生活します。(先生方、顔が一瞬ひきつる。)



加納弓 KANOH Yumi

奥山：スマートで現代的な感性を持っていると思う。

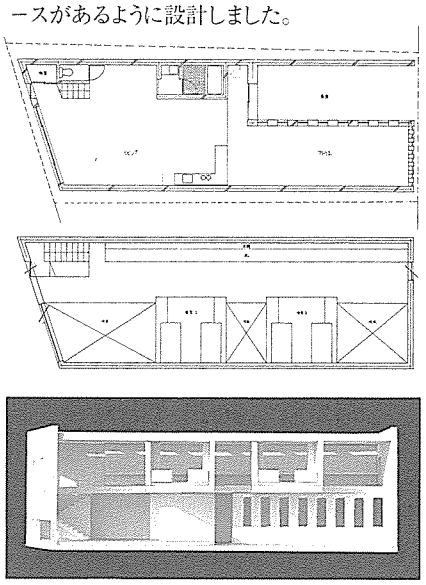
藤岡：地下がRCで、上が木造になってるけど、意図があるの？

加納：上は軽い感じにしたかったので……。

2階で視覚的連続性をつくり、1階で異なる機能の出入口を2つの道に対応させるなど、周辺との関係も見られた案、周辺環境への対応は乏しいが、家具のように個室を扱うことで個室を外部のテラスに連続する開放的な空間として示すことができた案、空間配列にコンセプトを明確に示した案など、それぞれ解体された現代の家族像を浮かび上がらせた設計は、その問題意識は評価できるものの、今一つ説得力に欠けているという感は否めなかった。

個室に対するより現実的な提案として、閉じた個室をより開かれたものに変えようとする案。

[長尾]——現代の住宅は、個人のスペースの隙間に共有スペースがあるように思いますが、ここでは逆に共有スペースの隙間に個人のスペースがあるように設計しました。



長尾樹偉 NAGAO Jui

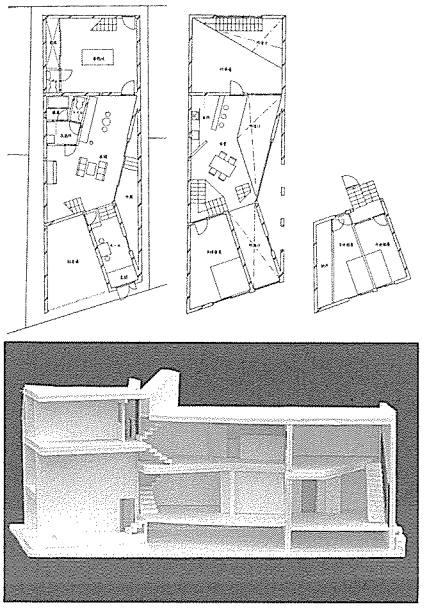
奥山：考えはわかるが、階段踏板の幅がまちまちで、プロポーションについて無頓着だ。

藤岡：縦長窓と横長窓の関連性がわからない。完全に上下の空間をつなげたいという意味ならあり得るけれど。

八木：ヴォイドスラブの構造にする理由がわからない。

うまく表現し切れているとは言えないが、吹抜に浮かぶ個室の床が、1階の連続した空間を緩やかに分節する構成はコンセプトによく対応していた。

[澤田]——私的な空間と、仕事場を繋げるために、その間を居間と食事室にしました。家族という社会を構成する単位が崩壊しないように、各個室は公共空間からアクセスするようにしました。



澤田正樹 SAWADA Masaki

藤岡：家族のあり方が問われている今、何故これまで通りの家族のつながりをつくることをテーマとするのか、君の意図が分からない。それから、この屈折した平面形の理由は？

澤田：それは、私的な空間と仕事場という相入れない空間が共存することの歪みを表現しようと思い……。

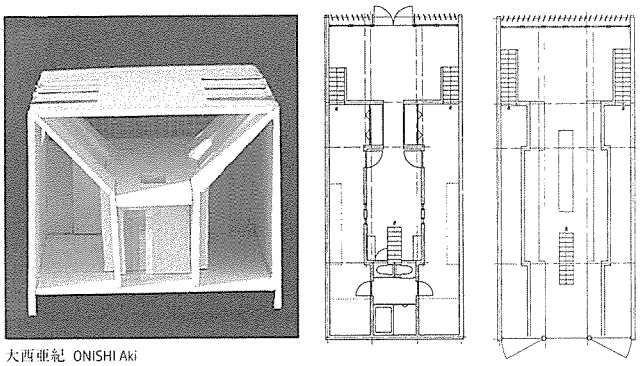
藤岡：恣意的なものにしか見えない。

塚本：でも、視線が抜けるように、内部に窓が配されていたり、きめ細かく設計している点はいい。

説明が近代的家族・マイファミリーの再生という紋切り型になってしまったが、個室と仕事場の緩衝空間として居間・食事室をとらえ直した空間構成は、SOHO(スモール・オフィス・ホーム・オフィス)の問題として整理し直すと面白そうだ。

周辺環境との関係よりも空間の造形表現の比重が大きい案。

[大西]——双子の姉妹のための2世帯住宅です。全く同じ形の寝室を両側に配して中央を共有スペースにしました。

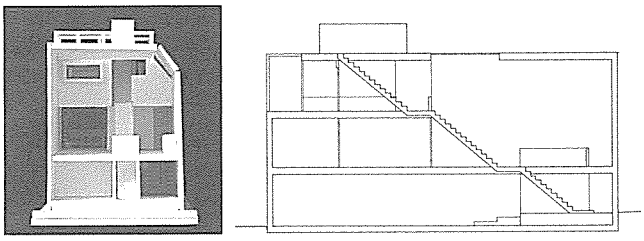


大西亜紀 ONISHI Aki

奥山:1階のアトリエ、真ん中に階段があって使えそうもないね。

八木:長手方向に窓が1つもないのは、トップライトがあるからいいと思っているんだろうけれど、あまり快適ではないよ。

[関]——階段や廊下というのは、移動する手段なだけで明るいイメージがないので、それをもっと楽しいスペースにしたいと思いました。



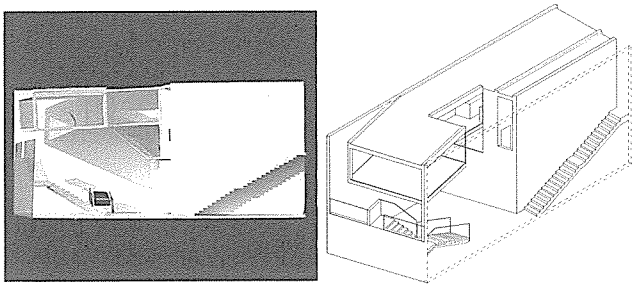
関卓志 SEKI Takushi

八木:階段にこだわっている割には、手摺や踏み面の材料とか、そのデザインのイメージが伝わってこない。

奥山:あなたは図面表現が良くないし、部分に対するイメージ全くがない。面白いことを考えてもこれでは伝わらないよ。

密集した環境の中で外部空間を住宅に引き込んだ案も見られた。

[塩崎]——緑道、商店街に挟まれていること、それと大井町線が走っていることから考え始めました。敷地全体を掘り下げてそこに通り抜けとオープンカフェをつくりました。上下で空間的につながりをもたせるためにいろいろなヴォイドをつくりました。

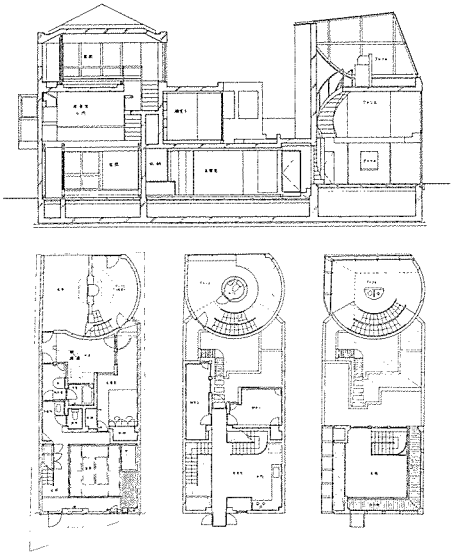


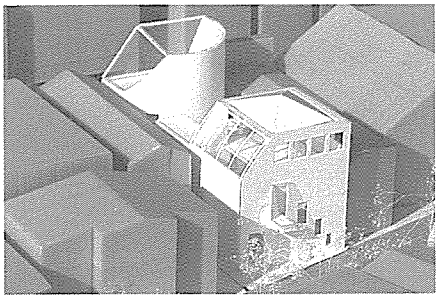
塩崎太伸 SHIOZAKI Taishin

塚本:この大胆なキャンチレバーは構造的におかしい。模型はいいけれど、図面表現がよくない。

奥山:この地下はオープンカフェとは言わないね。

[大野]——中庭を介して各機能が連絡できるようにし、どこにいても全ての階を感じられるようにしました。



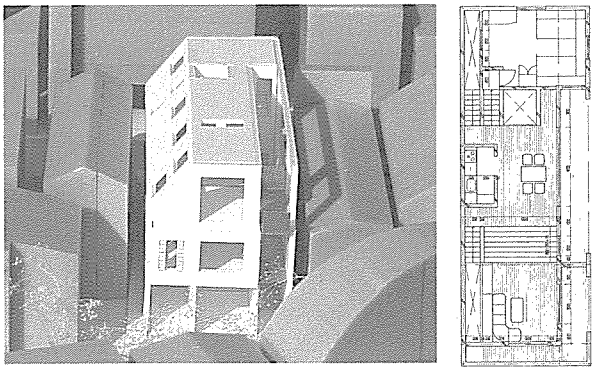


大野廉 OHNO Kiyoshi

奥山:沢山の部分をつなぎ合わせたデザインだけど、2年生にしては複雑な造形をよくまとめている。

八木:細部まで丁寧に設計されている。

[松下]——仕事場と生活の場が、何らかの形で関わるようにしたかったので、まず中庭をつくりました。向こうにいる人の気配が感じられるようにするために、階段をスリット状にしました。



松下隆 MATSUSHITA Takashi

塚本:この幅の狭さで中庭と言えるかな。

奥山:プランニングをもっと考えた方がいい。トップライトが異様だな。

藤岡:窓の位置は、エレベーション優先のように見える。

それ自体は悪いとは言わないが、内部と何らかの関係を持つと面白くなると思う。窓を開けるのは、いろいろな可能性によっているのに、ただ光を入るためというのではその可能性を閉じてしまう。

これらはそれぞれ表現は異なるが、外部空間によって、住宅と仕事場を繋げたりあるいは内部の空間の性格の違いをつくるという点では共通していた。

商店街と緑道という2つの異なる性格の道に挟まれた細長い敷地において、建築が周辺環境と関係を結ぶことで、その環境の特質を浮かび上がらせることが、同時に住宅の機能や空間の性格を規定することになるような、内と外の関係が重視された課題であった。学生たちはこれに対して、平面分割の方法や、2つの道の動線

的・視覚的連続、あるいは機能の違いと出入口の面し方による対応など、様々な方法で挑んだ。しかし、内部機能を満たすだけのものや、建築の造形をテーマにしている学生も多く、課題の意図が十分にくみ取れていたのかどうか、疑問が残った。

最後に、先生方の総評を聞いてみよう。

塚本：もっと早くエスキースを持ってきてくれれば、という案が多くありました。よくエスキースを持ってきて、その都度にそれなりの成果物を出している人は、着実にいいところまでいっています。エスキースを通して、自分の考えを絵や言葉で表現することを積み重ねてもらいたですね。

藤岡：もっと言葉を大事にしてもらいたい。今見てそれ程センスのありそうもない人の方が圧倒的に多いけれど、そういう人であればこそ、言葉で対抗しなければならないのです。様々な問題を言葉で語り、それを形に重ねることは、正確にはできないけれど、言葉で説明しようと努力することは一つの方法としてあると思います。

八木：設計にはコンセプト、つまり自分の考えていることをはっきりさせるということが要求されます。今回は初めての課題だったから酷かもしれないけれど、それが薄い人もかなりいて、なかなかやりたいことが伝わってきませんでした。逆にコンセプトがかなりはっきりしている人の中で、まぁ、それ以外のほとんどの人にも共通して言えますが、基本的な条件を満たしていないとか、スケールがおかしいとか、そういった建築を機能的に成立させるために最低限おさえておくべきことが欠けている人が多くいました。これからは、どんなところにいても寸法を計るという気持ちで、スケール感覚を身に付けて欲しいですね。

藤岡：設計をするとき、1つは与えられた課題のどこに可能性を見るかということが、とても重要になってくると思います。今回多かったのが、2つのヴォリュームの間に中庭がある構成ですね。だけど、例えばあの敷地というのはすごく細長くて、その長さということで何か可能性が開けるかもしれない。また、両側の商店街、緑道という異質なものを繋ぐということで何かできるかもしれない。いろんな可能性が実はあるわけです。それは初めから決まっているわけではなくて、皆さんに委ねられている。家族関係、或いは社会との関係、戸建住宅のもつ意味とかいろんなテーマがありえて、そこから引っぱり出しうる可能性がたくさんある。どこに自分がテーマを見いだして、それをどの程度ふくらませられるかというやりかたで設計する方法があるはずです。人によっては材料の組合せだとか、構造体の表現ということもあるけれど、それ以外にもどのような可能性がまだあるのかということを見せて欲しかったですね。

塚本：あの敷地は取り方によってはいろいろな定義付けができるような場所だったので、そこに住宅をつくることによって何かおもしろいものが発見できれば良かったのですが、敷地と関係のないことをやる人が多かったように思います。それから、住宅を建てることであの敷地の性格をどう定義付けできるか、その可能性を引き出そうとしていた人でも、図面でそれが表現されていませんでした。例えば、緑道の緑を取り込みたいのであれば断面図にそれをかくべきだし、アクソメに関しても、ダイヤグラム的な空間配列を示すものばかりだけど、あの建物を敷地にはめ込んだらどうなるか、ということを表現すればもっとよくなったはずです。

藤岡：緑道を断面にかいてないというのは、何を表現していいのかをみなさんがわかってないからです。この図面で一番伝えたいことは何なのか、それがわかっていれば、絶対かくわけだから。初めから決まりはない。ある目的がある時に、ある表現が意味を持ち、それが人にあるものを訴えかけるのです。コマーシャルの世界と一緒です。ズラーと並んでいる中で、一発で見る人の目を引きつけなければいけない。30秒コマーシャルをテレビで見ることだって、本当は勉強になるはずです。そういうプレゼンテーション、つまり、まずある意図があって、それをどう表現するか、というレベルをぜひ考えてもらいたいと思います。

八木：やはり図面については初めての設計課題だったせいか、基本的なことをちゃんとおさえていない人が多かったですね。線のメリハリが無いものが目立ちました。断面線は太く、見えがかりは細くというのはトレースの課題で教わったと思います。それから断面図というのは、自分の意図を空間としてはっきり出すためにかくものですから、断面の取り方も自分なりに考えて欲しいですね。

宮本：図面表現で、ちょっと調べればわかるようなことができていなかったりするのが結構ありました。そういうのは、本を読んだり、ディテール集を見ればすぐにわかることだから、自分でどんどんやって下さい。何人かの人は、未完成でもがんばろうとしたんだな、というのがわかるんですが、なげやりの人はもっと努力しなければなりません。

八木：GLがない断面図をかいていたり、配置図は建物の外形が見えるようにするために屋根伏せを書くものなのにそれがなかったり、寸法表示が極端に不足していたり、細かいところは相当目につきました。

塚本：初めての設計だから時間配分がわからなかったのかも知れませんが、設計というのは人を喜ばすことで、それで自分も喜ぶわけです。とにかくまずは相手を喜ばせなければいけない。それには、分かり易い図面をかく、きれいな図面をかくというサービス精神が要ります。その辺のサービスを怠らないようにして下さい。サービスしすぎて悪いことはないんだから。

奥山：当たり前のことだけど、評価は必ず伴ってきます。これから第二、第三、第四（これは選択）、卒業設計と全ての評価が出てしまう中で、設計をやっていかなければならないんですが、この評価というものは、非常に曖昧で何で俺は評価されないんだと思うことでしょう。今までの受験勉強や一年生の時と違って確かなところで評価することができないというのが設計というものです。でもやっぱり魅力的なものは、多くの人が魅力的だと思うわけで、それでも中には魅力的だと思わない人もいるという曖昧なものです。だから何が言いたいのかというと、必ずしも今回評価されたからといって次も同じように評価されるということではないので、また最初にできてた人が、卒業するときも優秀である、というわけでは必ずしもない。初め全然できなかった人が最後はできるようになっていること充分あるわけで、これからはそういう中で悩みながらも、ぜひ頑張ってもらいたいと思います。

八木：僕の友人で、ジャン・ヌーベルと同級生だった人がいるんですが、ジャン・ヌーベルは学生時代いつも図面が間に合わなくてすごく下手だったと言っています。卒業するまで誰が伸びるかわからないどころか、その後もまだまだわからないような世界ですから。

宮本：今回こういう課題をやってうまくいった人は、続けてまたがんばってもらえればいいし、もし失敗した人がいるなら、まだ最初ですから次をめざして頑張って下さい。ごくろうさまでした。

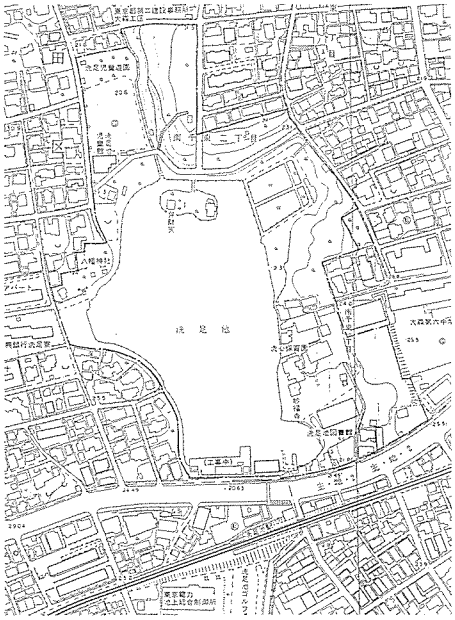
八木：それぞれみなさん、頑張り続けて下さい。

建築設計製図第三/第1課題「洗足池周辺に建つ博物館」

Junior-studio work: Spring semester: Museum adjoining Senzokuike

担当:
佐々木雄二[佐々木雄二設計室] 仙田満[教授]
SASAKI Yuji (Yuji Sasaki Architect), SENDA Mitsuru (Professor)

洗足池周辺に自由に敷地を選定し博物館を計画する。
博物館の内容についても自由に提案してよい。
構造も自由とし、規模は約4,000m²とする。



提出物:
1. 図面 a 配置図1:500(周辺環境との関係が説明できるものであること。外構・植栽計画も行うこと。) b 平面図1:200 c 立面図1:200 d 断面図1:200 e 詳細図1:50(展示室の部分の矩計図または平面詳細図) f パース
2. 模型1:500
3. 模型写真(図面中にレイアウトすること)
4. コンセプト(800字程度にまとめ、図面中にレイアウトすること)
•図面サイズはA1版(縦横は自由であるが、どちらかに統一すること)
•必ず、学籍番号および氏名を図面中に入れること(原則として右下)

佐々木雄二
SASAKI Yuji
1937年 東京都生まれ
1961年 東京工業大学建築学科卒業
1961年−97年 芦原建築設計研究所
主な担当作品:茨城県民文化センター、富士フィルム東京本社ビル、KPIタウン、国立歴史民俗博物館、清里北澤美術館、岩波書店一橋ビル、東京国立近代美術館フィルムセンター
1998年− 佐々木雄二設計室

講評

[佐々木雄二]

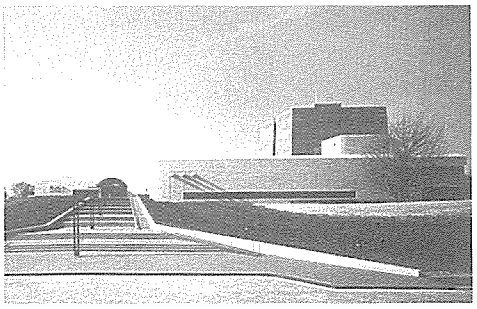
課題はじめに行ったスライドレクチャーには3種のスライドを用意した。はじめは芦原事務所の作品を見せ、そのそれぞれのコンセプトを話した。次に今回の課題のテーマ、博物館を例として国立歴史民俗博物館の外回りと内部中庭周りの様子を、最後には私が時間があるときに描きためてきた建物のスケッチの一部を見せた。建築のすばらしさを絵でも表現できたらと思っている。これらのスライドは私の軌跡の一部でもあるが、学生諸君に伝えたかったことは、設計という仕事の面白さ、楽しさを感じて欲しいと言うことだ。今、一緒に設計の課題をやっていても、建築の仕事はデザインだけでなく、計画、構造、設備、施工と幅広いものであり、人によっては役所で法規の仕事に就く人や企業で設計を依頼する側の仕事に就く人もいるかもしれない。将来そういう種々の仕事の就く人にも設計とはどういうことであるかを、その楽しさ、喜びも含めて知って欲しいと思う。

この課題では、まず洗足池周辺と決められた場所のどこを用いて設計していくかという場所の選択が必要であり、池を含めた周辺環境とどう調和させるかという問題がある。そしてどのような博物館を構想するか。規模こそ約4000m²と定められているが、その他については博物館の内容から構造に至るまで自由であり、ここに構想力が求められる。

そこで洗足池周辺を歩いてみて、どのような博物館を提案するかを考えてみることと、実際の博物館を訪れて、博物館とはどのようなものがあるかを考えてみることを学生諸君に求めた。そして博物館では、来館者が普通に歩くロビー、展示室などの部分以外に、博物館を支えるための職員の活動スペースが大変重要であることに注意して欲しいと伝えた。

途中、エスキスの対話をしながら中間講評、最終提出、講評と続くが、はじめのころ洗足池のように落ちついた、残された自然の中に博物館のような計画があって良いのかという戸惑いの気持ちがかなり表明されたのが印象的だった。それぞれの場での指摘に的確に反応し、何度も案を作りかえて応えてくれたりした、その若い熱意と創意にうたれ、素晴らしい可能性を感じた。

私にとって種々のタイプの建物を設計してきた中で、国立歴史民俗博物館を担当したことは、とても素晴らしい経験だった。事務所としても初めての本格的な博物館であったし、基本的なことから学び、内外の実例を見学して歩いた。設計の最大の問題は、その大面積をどう敷地にはめ込むかというであり、その大半を地中に埋め込むことで成立させた。貴重な展示室を持つ博物館の特質とその環境から外壁を低く抑えて閉鎖的に構成し、内部は中庭に向かって開ける構成とした。展示室はこの中庭の周囲に配置し、順次落差を下りながら次の室に至る構成とし、芦原義信がマルセル・ブロイヤーから学んだ空間の流動性やスプリット・レベルの構成のひとつの実現化を企てた。敷地の調査からはじめ、設計、監理、展示計画と関わり、10年の歳月を経て開館にこぎつけた貴重な経験であった。これらの経験が学生諸君の設計製図への取り組みに少しでも力になったならとても嬉しいと思う。



国立歴史民俗博物館

[仙田満]

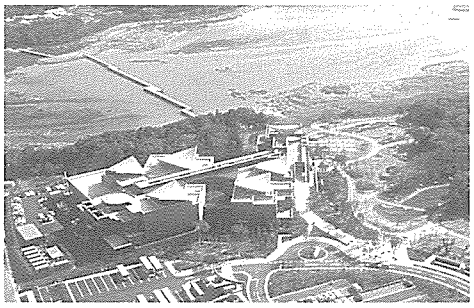
建築の設計においては、その基本計画が重要だ。建築の設計はもちろん、敷地、機能、所要面積等が示されて、プランニングし、デザインするという形と捉えやすいが、私の場合には発注者が大まかな機能は

考えていても具体的なプログラムを提示されることは少ない。科学博物館にしろ、児童施設にしろ具体的な規模、プログラムのほとんどは建築家である私が提案する。ある機能を持った建築をつくろうとした場合、最も重要なのは敷地の選定である。どの場所だったらその機能を十分に発揮し、そこを訪れる人々に感動を与えられるかを考える。しかしながら建築家が敷地の選定のプログラムから参加するチャンスはあまりない。私自身の場合でいえば、民間の場合で2，3例あるかないかであろう。多くの場合敷地が決定されていて、そこにどういう内容の物をどのように建設されるかを求められる。立地の特性を調査し、そこに来る人々をイメージし、どのような機能をどのくらいの規模で用意すれば人々が魅力を感じ、楽しみ、集まるかを考える。

この課題では洗足池という大きな立地が与えられているが、その周辺をどのように切り取ろうとも、またどのように変更しようともある程度許される。その機能にふさわしい敷地を選定し、その規模を決定する。建築的な環境だけでなく、都市的、造園的、展示ディスプレイの内容も要求されている。しかしながら敷地の選定、プログラムの提案、そしてそれに適合した都市、建築、造園、展示デザインという幅広い要求課題に答えている人は少ない。

大事なことは学生たちがプロポーズするということである。プログラムは与えられるものでなく、設計者が提案すべきもの、設計条件は常に固定的なものでなく、良い提案によって変えられるものなのだということを知ることが大事なのである。設計とは問題解決型であるだけではだめである。課題を設定し、課題を発見することが重要なのだということを理解して欲しい。デザイン、設計とは一に提案、二に提案なのだが、良い提案とは説得力のある提案である。さまざまな条件も常に原点に返って問い直す力を身につけなければならない。設計における形の提案はほんの一部でしかないこと、提案とはそのプログラムの総体であることを理解して欲しい。

この課題は私が非常勤講師として本学の建築学科の設計製図を担当した時からであるから、7年ほど続いている。その中ではきわめて優れていると思われる提案もあった。しかし7年も続くと学生の方が本誌等を通じて傾向と対策を考えてしまい、同じような傾向の作品が見られるのは残念である。確かにある立地における博物館の可能性は無限ではない。しかしさまざまな制約の中で今までには考えられなかった新しいアイディアというものはあるものだ。建築において常に新しいものがよいとは限らないが、少なくとも学生の時代は新しさを追求することが大事である。



ミュージアムパーク 茨城県自然博物館

「PARALLEL ART AND SOCIETY」

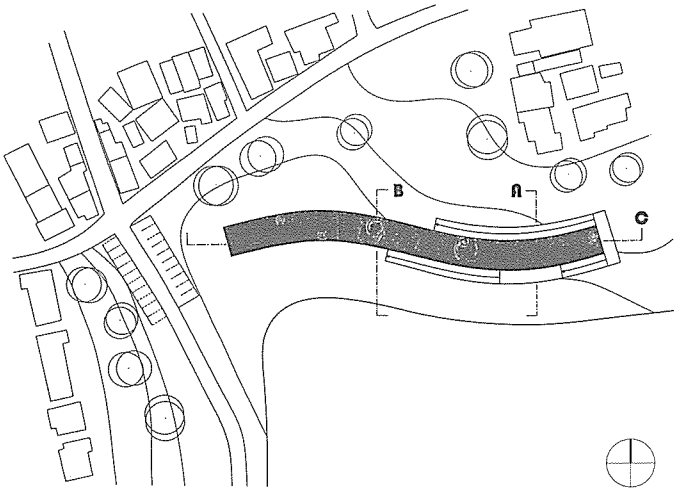
Parallel art and society

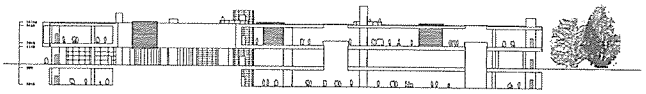
田中正洋

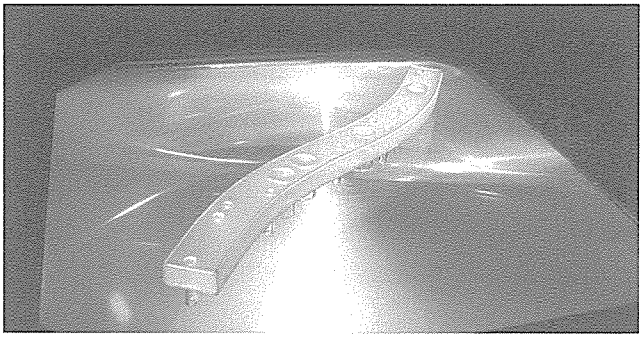
TANAKA Masahiro

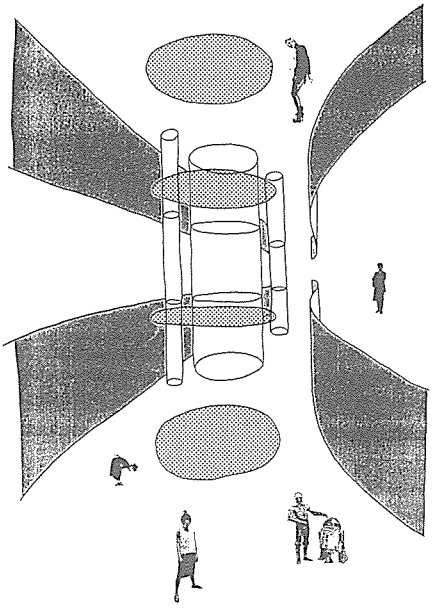
仙田：S型の形態と平面、ピロティーをもった細長い四角いチューブ、全体に透明感のある雰囲気。どちらかというと今流行の建築的ボキャブラリーであるが、ともかくも要領よくまとめている。垂直的な動線がもう少しうまく機能するよう考えればもっと良くなったのだろう。

佐々木：美術と社会を展示の2軸として、地階と2階につくり、これを行き来して対応関係を知り美術を理解させるとする。コンセプトは良いが両軸の結びつきが困難である。図面、模型とも表現の方がリードしている案である。





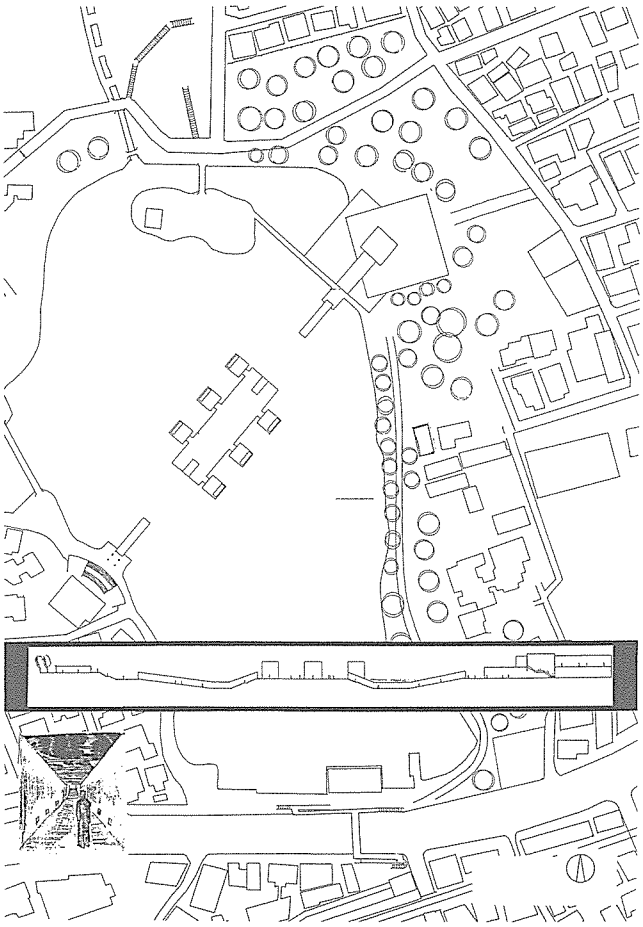


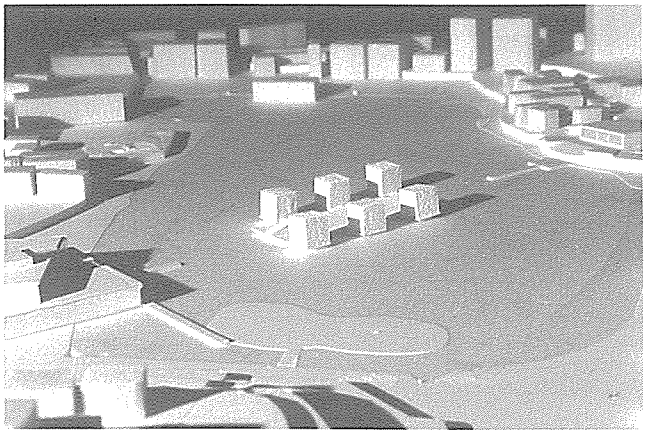


「洗足池美術館」
Senzokuike museum

柳沢芳太郎
YANAGISAWA Yoshitaro

仙田：池に浮かぶ展示室は今までも数多く提案された案であるが、休憩所、展示室、本館が池を横断した形で設置されたのはユニークといえるだろう。島状の展示室には水中トンネルのアプローチの他に舟によるアプローチも考えられたら良かっただろう。
佐々木：洗足池の水中、地面を活用したユニークな案。池に浮かぶ6つの展示室の効果が面白い。池全部が博物館になった感があり、洗足池がこれによって大きく変わっていく可能性を示している。秀作。

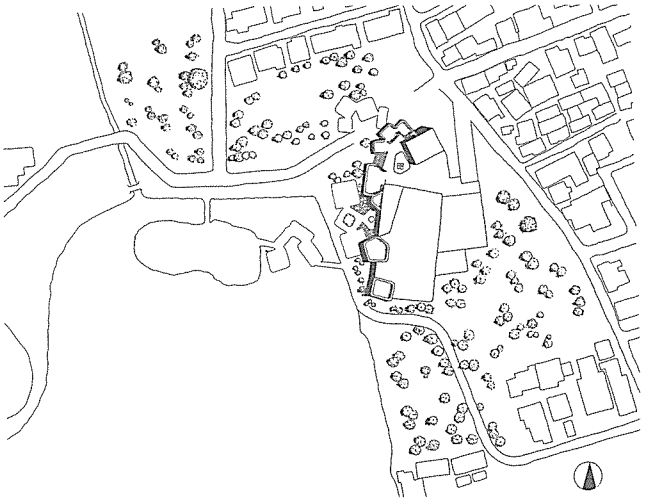


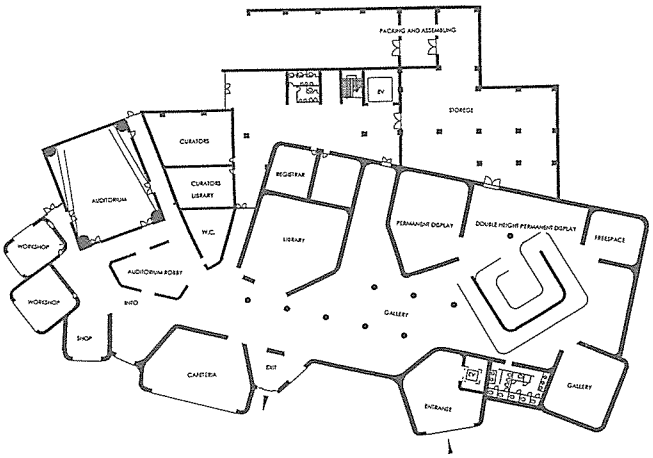


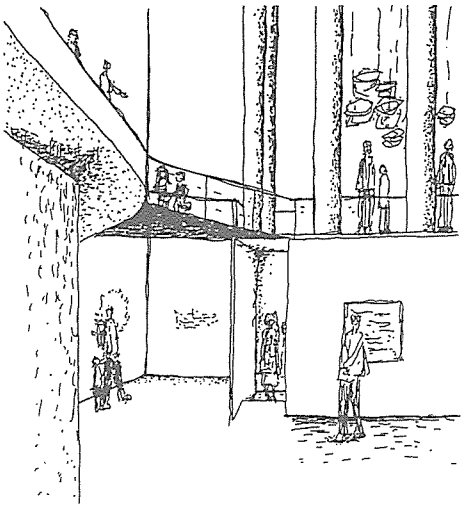
「ゴミミュージアム」
Trush museum

金森久美
KANAMORI Kumi

仙田：ゴミミュージアムというテーマの捉え方はおもしろいと思うが、建築的、工法的、展示的な提案をもっとさぐる必要があろう。ただゴミやリサイクルの製品をならべるだけではおもしろくもないし、魅力的でもない。
佐々木：テーマを最も現代的なゴミに絞って提案している。コンセプトに訴える力があるが、これをどう形態にしていくかが大問題である。それを上手く解決の方向に進めている。内観イメージスケッチも魅力的に描けている。



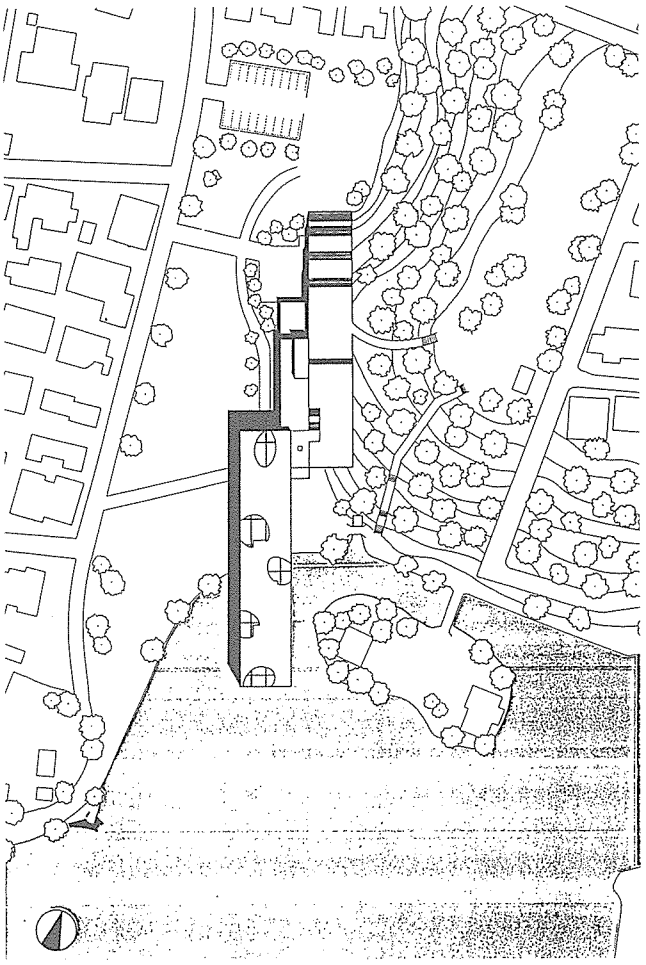




「洗足池文明史館」
Senzokuike museum for the history of civilization

照井崇
TERUI Takashi

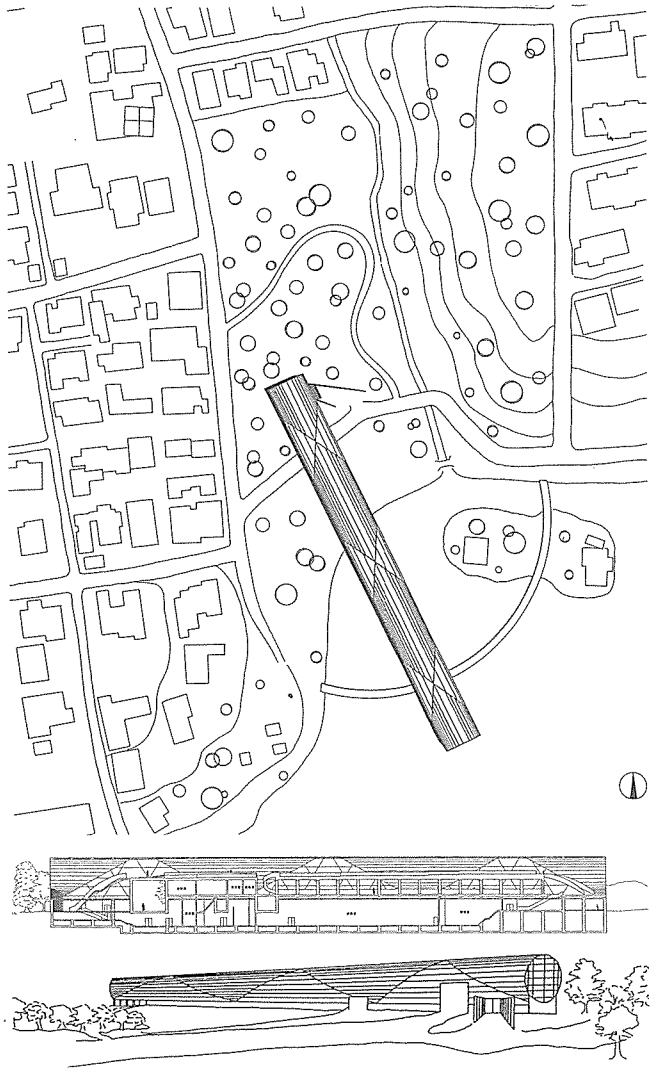
仙田：建築的なおもしろさ、景観的なとらえ方、池との関係等、環境的提案はなかなか良いが、文明史館という大テーマをここにもってくる理由が不明であるし、またそれと入れ子型の空間構造との関係が弱い。テーマと空間構造は一致している必要がある。
佐々木：展示室周囲につくられた入れ子構造の空間が、この博物館の表情をつくると共に、自由に出入りできる空間であることから、博物館の性格を作り出している。

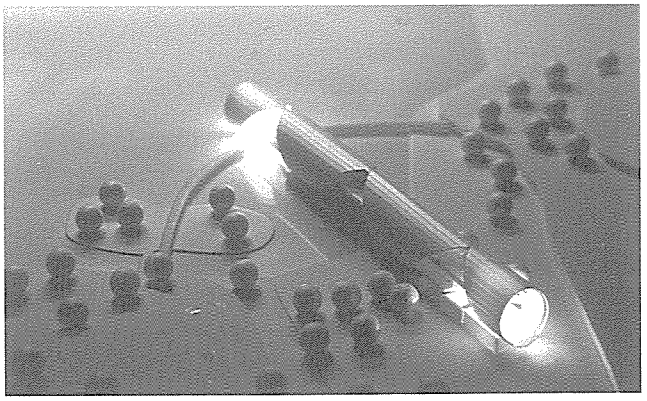


「シネマ・ミュージアム」
Cinema museum

金子牧子
KANEKO Makiko

仙田：形態的なおもしろさは抜群であるが、その形態とシネマミュージアムの機能的な関係は希薄である。内部の空間が映画の楽しさを伝えられていない。
佐々木：複雑な機能をシンプルな形態にまとめ上げている。池に突き出した形態は、園路の円弧にあいまって魅力的である。映画は大勢の人と一緒に観るという楽しみもあるので映写ホールも工夫して計画に入れて欲しかった。

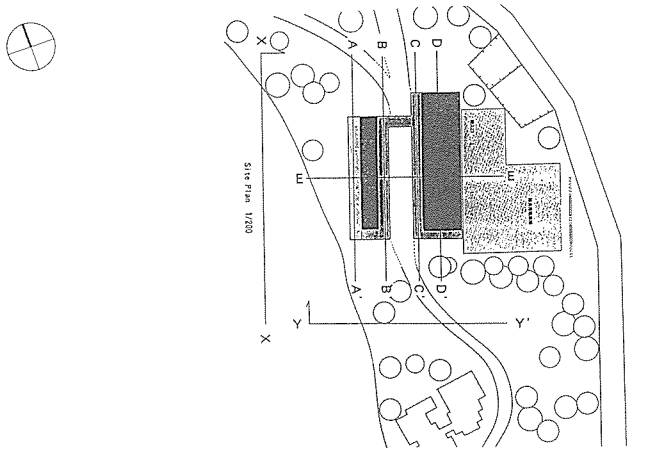


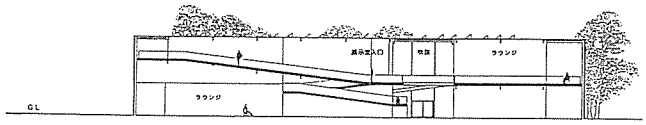


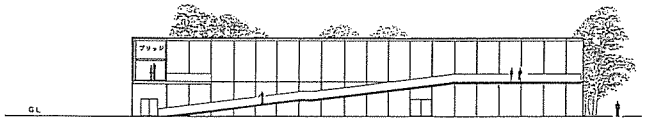
「Through 時間と空間」
Time and space

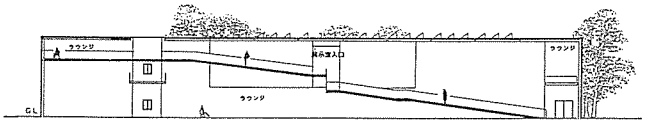
若木健吾
WAKAKI Kengo

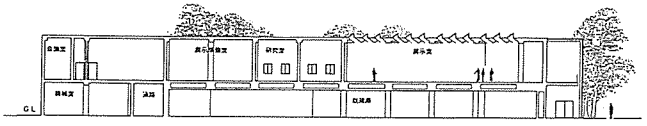
仙田：公園の地域的な博物館という設定、2階建てで分棟にしてなじみやすい空間の領域等、ヒューマンで気持ちのよい博物館の提案と思われる。しかし平面計画はうまくない。特に展示動線はわかりにくい。分棟化をもっとコンセプトとして理論化すべきである。
佐々木：スロープで来館者の動線を処理し、動線の空間がのびのびとしてカーテンウォールに上手くマッチしている。建物の性格付けがもう少し欲しいが、形態的にはとてもよくまとまった案。

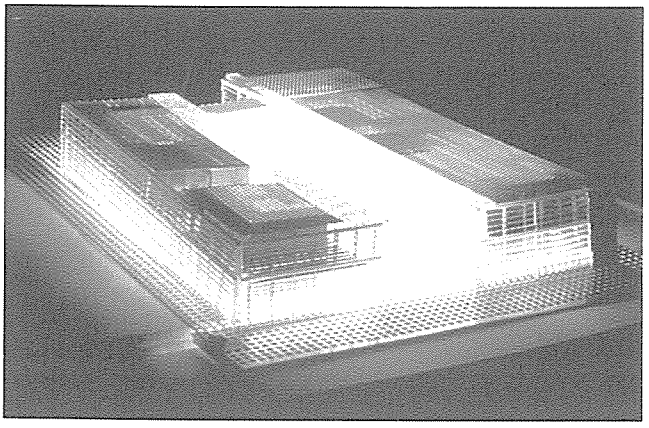








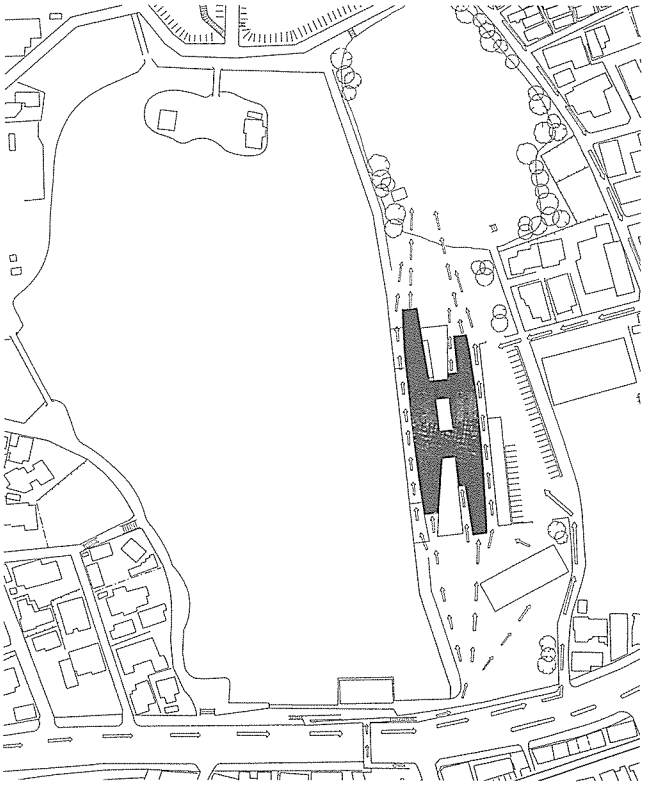


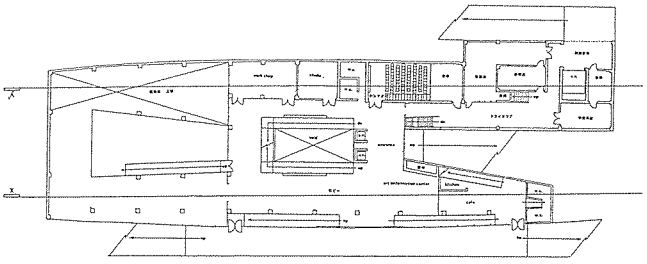


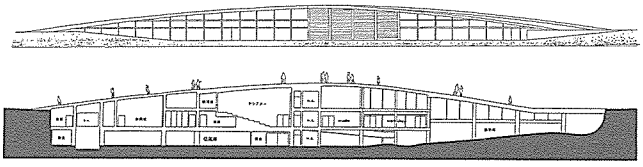
「Possibility of Three Dimension Space Museum for Modern Art」
Possibility of Three Dimension Space Museum for Modern Art

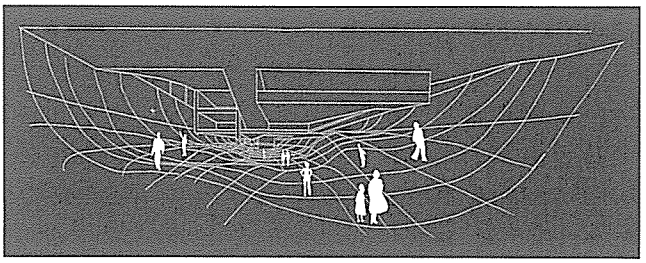
中島光平
NAKASHIMA Kohei

仙田：大地にかけた2つの太鼓橋状の建築といえる。周囲の景観を読み込んだおもしろい提案である。2つの太鼓橋の間のクレバスがこの美術館を豊かなものとしている。トポロジカルな空間としての展示室も楽しそうだ。
佐々木：紆余曲折を経て彼はついに曲面の空間を提案した。現代アートにふさわしい場を提案することを目標にこの案はつくられた。図面から見ると楽しい空間であり、全体の形態、姿もなかなか良い。あと問題が残るとすれば、テンポラリーの建築ではなく、恒久的な建築としてこの空間が生き続けられるか否かである。









「SENSE MUSEUM 意識と感覚の博物館」

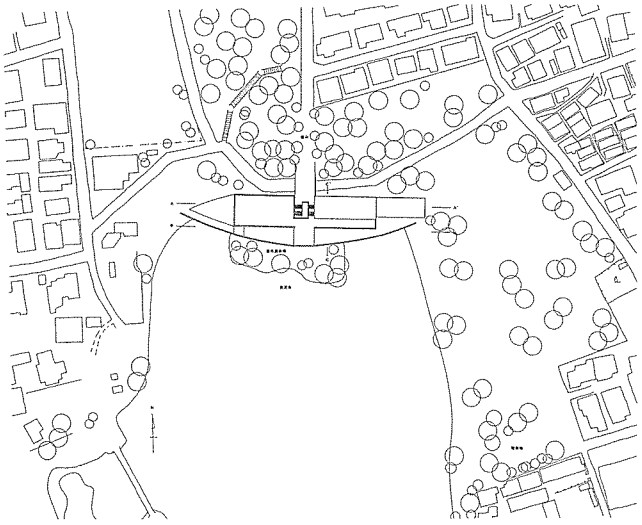
The museum for consciousness and sense

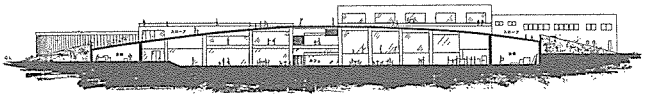
渡会奈由香

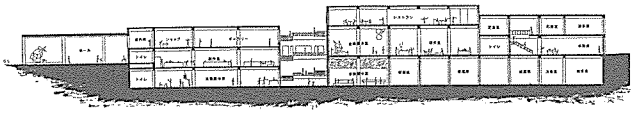
WATARAI Nayuka

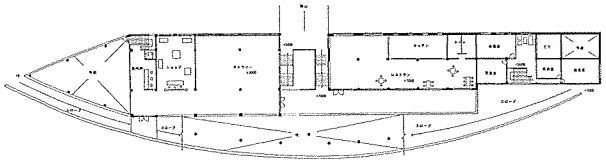
仙田：環境に対する建築的な座りという点では優れた提案がなされている。しかし意識と感覚という博物館のテーマとその建築的空間の関連性が全く感じられないのはどうしてだろうか。

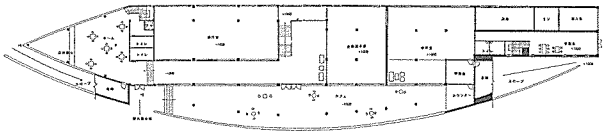
佐々木：洗足池に残る良さを強く意識して計画した案と言えよう。駅や中原街道からの視線を受けとめる堂々たる配置で、弁天島を前庭とした点や、桜山との一体感など面白い。そして模型写真がその素敵な効果を示している。

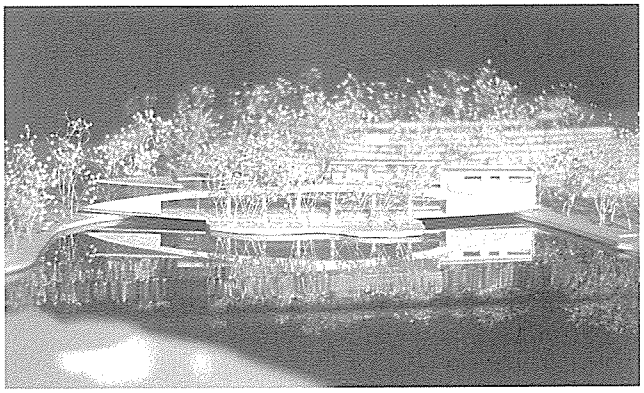












「LANDSCAPE MUSEUM」

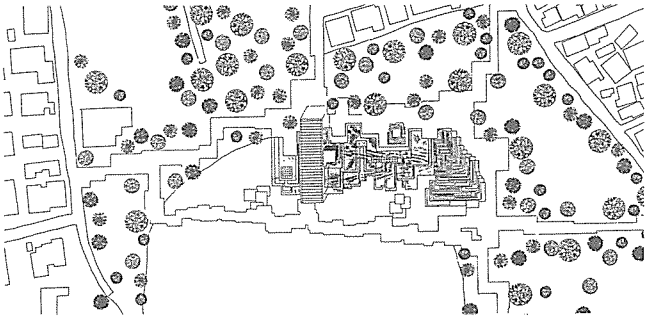
Landscape Museum

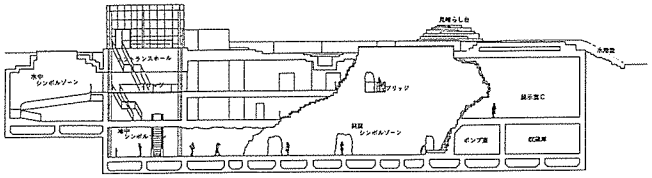
西嶋順子

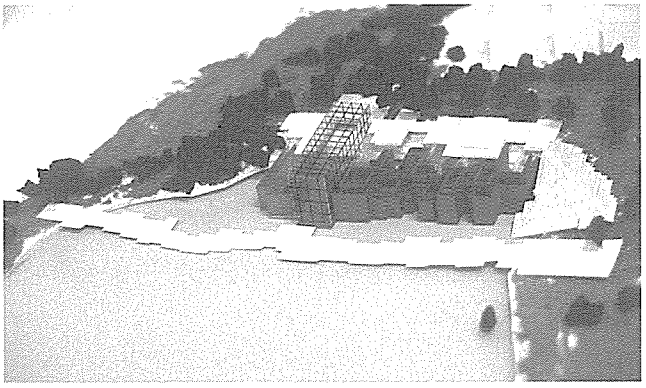
NISHIJIMA Junko

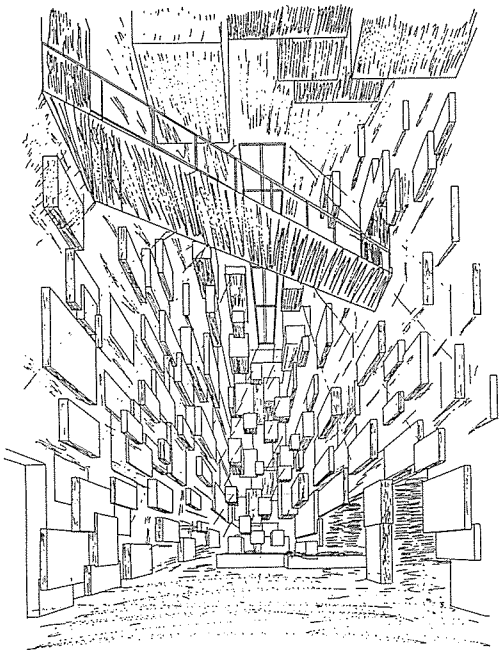
仙田：建築をランドスケープ化させた提案がおもしろい。特に洞窟的空間は実際にも魅力的な空間になる可能性がある。一部だけでなく全体をそのようなコンセプトでまとめれば、より魅力のあるものとなったに違いない。

佐々木：建築が地形の一部であるように、斜面の下に埋め込み、建築物の上を流れる水、洞窟のような展示ホール、見晴らし台のある屋上、池の環境の中に溶け込ませながらの演出は見事であり、表現の強さを持っている。秀作。







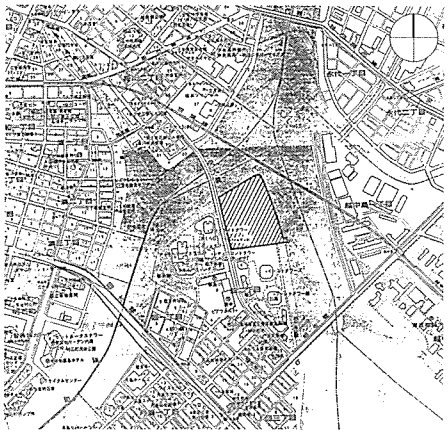


建築設計製図第三／第2課題「大空間建築」

Junior-studio work: Spring semester: Huge space

担当：
服部紀和[竹中工務店] 木村克次[東急建設]
久保寺勲[巴コーポレーション] 仙田満[教授]
HATTORI Norikazu (Takenaka Corporation), KIMURA Katsuji (Tokyu Construction),
KUBODERA Isao (Tomoe Corporation), SENDA Mitsuru (Professor)

大架構で覆われる部分の投影面積が5,000m²以上の空間を計画する。
構造方式・材料は自由。
敷地：大川端リバーシティ地区
機能：スポーツ施設、展示場、ホール、レクリエーション施設など自由に設定してよい。



提出物：
1. 模型1:300[大架構部分の構造システムを表現すること]
2. 図面[以下をA1版3枚以内に納める]
a――配置図1:500[周辺環境との関係が説明できるものであること。必要であれば、周辺地区の既存施設を見直すことを併せて提案してもよい]
b――平面図1:300[各階]
c――立面図1:300[2面以上]
d――断面図1:300[2面以上]
e――説明図[計画主旨及び構造システムを模式図等を用いて簡潔に説明すること]
f――仕上表[主架構を含む主要部分のみでよい]
g――パース[着色とし、外観・内観(大架構で覆われている部分)各1面]
h――模型写真[図面中にレイアウトすること]

服部紀和
HATTORI Norikazu
1964年 東京工業大学工学部建築学科卒業、竹中工務店設計部
1996年 取締役(設計担当)
1983年−1986年 東京都立大学建築学科非常勤講師
1996年− 神奈川大学建築学科非常勤講師
主な担当作品：大手センタービル、日本IBM大和研修所I・II期、SONY本社、日本IBM箱崎ビル、セイコー電子工業幕張新本社

木村克次
KIMURA Katsuji
1940年 秋田県生まれ
1964年 日本大学卒業
1993年 東京工業大学にて工学博士取得
現在 東急建設(株)設計本部構造設計部長

久保寺勲
KUBODERA Isao
1944年 長野県生まれ
1969年 名古屋工業大学建築学科大学院修士課程修了
巴組鐵工所(現巴コーポレーション)建築構造設計部
1986年 東京工業大学にて工学博士取得
現在 巴コーポレーション代表取締専務

講評

[服部紀和]

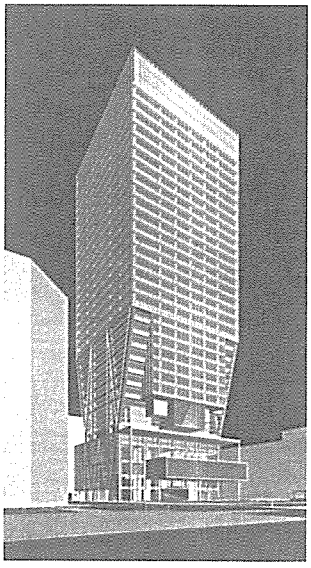
大空間建築まず頭に浮かぶのはバックミンスター・フラーが1961年に発表した「NYCジオデシックドーム」の構想である。マンハッタン島の東から西端までを直径とする、つまりイーストリバーからハドソンリバーまでのおよそ3kmをすっぽり覆うというもの。常に望ましい天候と居住環境のもとで大都会のあらゆる営みを封じ込め、都会全体をインテリア化するという究極の大空間、このコンセプトが万博アメリカ館や各地のドーム建築へとつながるのである。

今回の課題の捉え方の一つも「都市」を考えることであったと思う。計画地は都心のウォーターフロント、その形態は周辺の大型建築と一体となって都市景観に少なからず影響を及ぼすはずであるし、大空間建築の内容企画にあたっては収容力や交通動線も考慮することは当然であり、集客、活性という点からはより複合的、立体的な文化、教育や商業の施設が発表されねばならないだろう。

第二のポイントはこれとは逆に「等身大」で建築を考えるということ。「都市」を見据えるスケールが1/1000や1/10000でその視点も鳥やガリバーの眼であるのに対し、設計者には同時に原寸1/1の視覚、聴覚が求められる。皆さんに自らの設計した空間を今一度模型や図面の中に踏みいって空間を体感して見て欲しい。敷地と建物、内部空間と外部、さらには隅田川の水面へとつながる様々な情景がひらけてくる。どんな巨大空間も「建築」と呼ぶからには本質的に人間が利用するということ、人間にその空間が良い感応を与えるものであるべきで、「人間」を尺度とした鋭いスケール感覚を常に磨くように心がけたいものと思う。

第三は今回一番勉強してもらいたかった、架構システム、構造に対する基本的知識とセンスである。大空間建築は特に古今の名作を見るとダイナミックな中に美しい力の流れを感じないではいられない。実物や写真を極力多く見て学ぶことがまず肝心であろう。また皆さんが苦労して模型をつくったのも重力や外力を身を持って感じ、「力学」を実体験することにあるのである。

本課題はこのように都市・人間(自分)・架構体3つのスケールを合わせるという難しさがあったため取り付きにくく、進捗が気になったが締切間際での追い込み激しく、なかなかの力作も出て安心もし感心もさせていただいた次第である。



現在建設中の新東京サンケイビル 東京・大手町

NYCジオデシックドーム B.フラー

[木村克次]

大空間建築という課題に対してその設計に求められる条件は、最近になって様相が変化してきている。大空間と呼べる建築の誕生以来、近年に至るまでは、まず礼拝堂、スタジアム、あるいは倉庫などといった、ある一定の使用目的があって、それに沿った要求事項が発生し、設計者にはそれらをいかに忠実に表現するかが求められていた。それに対し現在では、確固たる定まった要求はもはやほとんどの場合存在せず、最短一日のサイクルで発生するイベントに、柔軟に対応できる空間が求められることが多くなってきている。したがって設計者は、設計時には想定されていない方法によりその空間が利用されることを前提としなければならず、さらには催されるイベントも含めての提案など、新たなマーケティングの創造能力をも要求されていくことを覚悟する必要があろう。

近年、大空間構築のための技術は仮設も含め、めざましい進歩を遂げてきており、実績の蓄積も手伝って、野球のスタジアム程度の規模ならば何らの支障もなく施工することが可能となってきている。このような恵まれた環境のもと、最近建設されているドームなどの大空間建築物の中には、設計者の自由な発想により創出された、今までに類を見ない新しい構造システムが採用されている例が多く見られる。伊東豊雄氏の設計になる、秋田杉材を格子状に構成した秋田の大館樹海ドームや、二重空気膜構造のパークドーム熊本などは、構造(架構)システムが見せる意匠的な効果もさることながら、構造力学的にも非常に合理的な建築物となっている。

本課題について、スライドおよびビデオを用いた講義は、以下のような点に留意して行った。(1)大空間を実現させるにあたって、構造的に問題となる事項を洗い出すこと(2)過去の実施例を紹介しつつ、大空間建築物に用いられている構造システムにはどのようなものがあるかを知っていただくこと(3)それら構造システムに特有なフォルム、ディテールなど、構造によってもたらされる意匠的効果を理解していただくこと(4)以上より本課題を設計するにあたって、発想のヒントとなるものを掴んでいただくことである。施工法などについてもいろいろな例をご紹介したが、これは施工法も含めて設計せよということではなく、大空間の構築はそれを実現させる技術があって、はじめて可能であるということを理解していただきたかったためである。

[久保寺勲]

「重力との対話」

設計製図第三課題「大空間建築」の主題は言うまでもなく空間のデザインであり、構造力学の立場からは「重力との対話」のイメージがある。地球上の全ての物体をその質量と重力加速度を掛け合わせた力で地球の中心に向けて引きつけているのが重力であり、これをいかに効率的に処理するかが構造上の中心課題となる。もちろん構造体には重力以外の荷重(地震荷重や風荷重など)も作用するが、大空間建築で支配的な荷重は自重や雪によって発生する重力である。

構造計画にあたってまず、決定すべき項目は使用材料と構造方式であろう。「対話」における使用言語と文法に相当する。また名詞、動詞、形容詞、助詞などの単語は構造体の構成部材で、部材毎に役割や意味(例えば圧縮に強い、引張りに強いとか接合の役目など)定まっており、これらを適宜組み合わせてはじめて正確な意志の疎通(バランスのとれた力の流れ)が成立する。自分が伝えようとする意志を相手に正しく理解してもらうにはためには、一方的に主張するだけでなく、相手の受け取り方や質問、疑問等に細心の気配りをし、丁寧なやりとりが必要となる。力の流れも同様で力が作用すれば必ず反作用(反力)が発生し、両者の仲立ちをするのが剛性であり、構成部材間の剛性をバランス良く配置することが肝要である。「対話」における発言では、伝えようとする主旨に最も適合する単語を選んで的確に表現することが大事で、大げさすぎる表現でもはっきりしない(弱い)表現でも主旨は伝達しない。これは構造計画において、伝えようとする力の種類や大きさに応じて、構成部材の最適な形状やディメンションを選ぶ過程と全く同じである。従って設計者の選んだ構造方式や使用材料の枠内で、構造体の大まかな力の流れを読みとり、各構成部材が受け持つ大略の力(圧縮、引張、曲げ、せん断)の大きさも検証して、断面形状や部材の大きさを決めるプロセスが重要となる。この部分を粗雑に扱うと、とても持ちこたえられない構造となったり、バケモノの様なゴツイ構造となってしまう。これらの作業は綿密な構造解析や構造計算をするのではなく(これは専門家に任せればよい)、紙の上で簡単にできる程度の略算で充分である。即ち秀でた解析能力ではなく、「極当たり前の構造センス」で対応する領域の問題であるが、構造計画上最も重要なプロセスである。

以上の手順を踏んでバランスの良い構造体が設計できたとしても、即ち「対話」において自分の主旨が相手に理解してもらえたとしても、その内容で相手が納得し賛同してくれるかどうかは未だわからない。そのためには、相手の価値観や思想のバックグラウンドと整合するまでやりとりをして修正と調整を重ねる行為が必要となる。これは建築設計において意匠計画や設備計画に構造が整合するかどうかの検討を試行錯誤しながら重ねるプロセスである。これらが全てうまく進められた時、はじめて全体的にバランスの良い作品が生まれるものと考えられる。以上の点が構造技術者として常に学生諸君に言い続けてきた内容であり、作品個々についての評論はしないが全体的に構造の質は良くなっていると感じた。

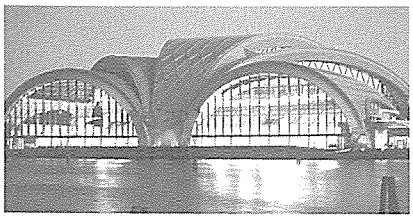
21世紀を迎えるにあたり、建築設計の分野でも性能設計が主体となることが建設省で検討されており、施主の要求性能を満足するものであるなら、どのような手法でも許されるというように、設計の自由度が急激に広がる時代となる。この場合、先に述べた「極当たり前の構造センス」がさらに重要になると思う。学生諸君の奮起を期待する。

[仙田満]

1ha近い大空間の課題はある意味で本学らしい課題だといえる。かつて本学は構造の東工大といわれ、優れた構造技術者を輩出した。私の知る限りでは優れた構造技術者はほとんどの場合、デザインもうまい。デザインマインドのない構造技術者は単なる構造計算屋などといわれる。本学出身のデザイナーは少なくとも構造的に筋の通ったデザインをして欲しいと考える。小さな住宅を設計する場合でも合理的な構造が要求される。現代はある意味で何でもでき、技術的可能性が無限にみえる時代であるが、また一方で無駄のない合理的な構造が評価されるべき時代なのだ。そういう点で構造にも強く、デザインにも強いデザイナーが本学出身者として求められる。

私自身で、1ha近い大空間の構造をもつ作品は東京辰巳国際水泳場である。さまざまな構造的検討、デザイン的検討を経て5本のボールトを組み合わせる形態にまとめたが、外の形態と内的、機能的要求のすりあわせに苦労した。大空間は一歩間違えばきわめて高価なも

のとなってしまう。現代の技術を生かし、また新しい工法をも開発しながら十分にリーズナブルなコストで実現しなければならない。常滑体育館では斜め格子型の梁をテーマとした構造となっている。これは沖縄の浦添市の指名コンペに応募して落選した案であって、その時にいつか実現しようとした案である。平面的にも立面的にも斜め格子を基本としている。現在設計監理中の但馬ドームは、私の建築で最もその規模が大きな作品である。面積24,000m²、高さ60m、野球とサッカーができる。オープンコンペで勝ちとったものであるが、同種の伊東豊雄氏の秋田の樹海ドームや第一工房の熊本のパークドーム等(工事規模80~90億円)とほとんど同様の面積、体積規模であるにもかかわらず、約45億円でしかも開閉ドームというローコスト建築を実現しようとしている。とにかく大空間建築はとてもおもしろい。さまざまな挑戦をしてもらいたいと考えている。

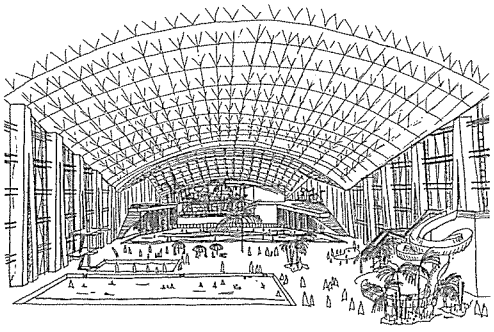


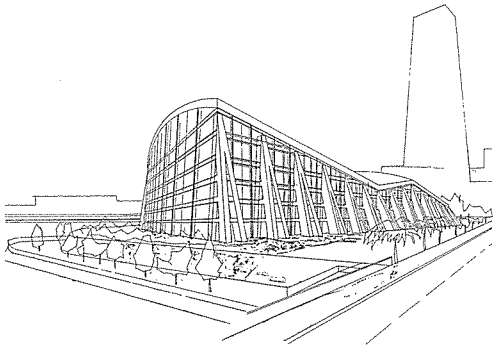
東京辰巳国際水泳場

「月島アミューズメント・ジャングル」
Tsukishima amusement jungle

岡田健
OKADA Ken

仙田：ダイナミックな構造形態の提案だ。しかしプールと植物園との関係については、その断面計画をもっと考えられたはずだ。また全体の回遊性を検討すべきだ。
木村：円筒屋根と列柱によって一つの巨大なマスを形成しており、それを狙いとするならば成功といえるが、周囲に与える威圧感は相当なものである。このような開けた敷地だからこそ可能な設計といえよう。
服部：植物と水を主役とした温室空間　ジャングルは大変魅力的で立体トラス屋根もこのコンセプトにぴったり、これを支える列柱もコンクリートの樹として存在感がある。テーマと構造体がよく整合している。

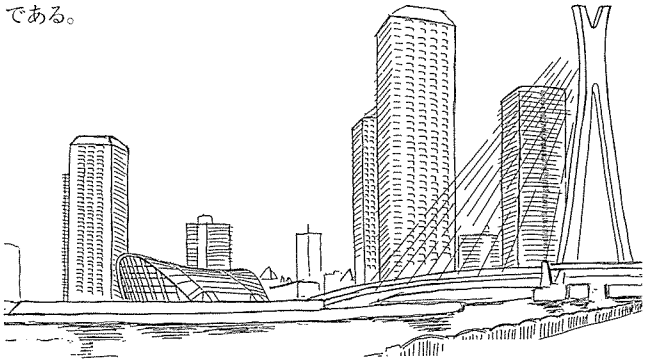


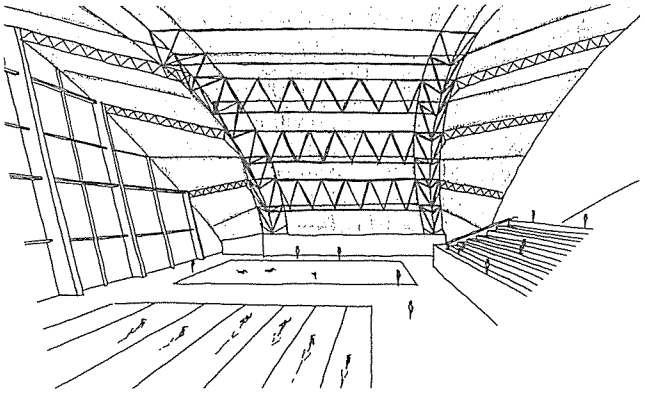


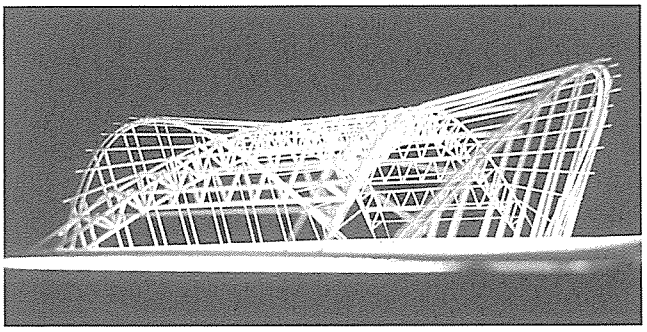
「月島スイミング・プレイス」
Tsukishima swimming place

小林陽一
KOBAYASHI Yoichi

仙田：2本のメインキールアーチに羽を広げた形のプールは形態的にも、構造的にも優等生的提案である。平面構成に新しさ、工夫が欲しい。
木村：2つのプールをアーチで構成される大屋根で包み込んだもので、スラスト力の処理などに疑問は残るが、安定感があり、好感の持てるデザインとなっている。が、内部空間と大屋根との関係という点では多少不満が残る。ただ覆っただけという印象を与えてしまっている。平面図の表現方法などにも留意して欲しい。
服部：構造計画、平面構成とも標準的な内容の水泳場である。「月島」という場所性がどう捉えられているか、また対称型形態でありながらメインの50mプールの位置のずれがインテリアとして気になるところである。







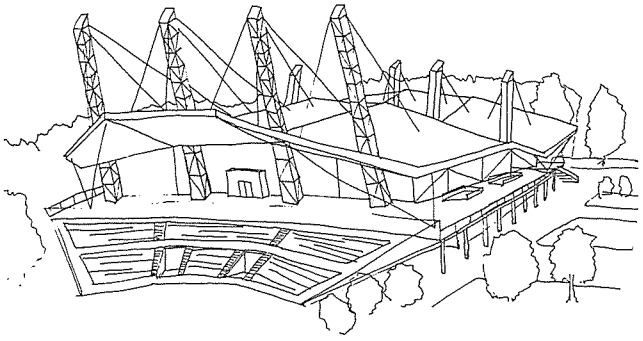
「スポーツパーク」
Sports park

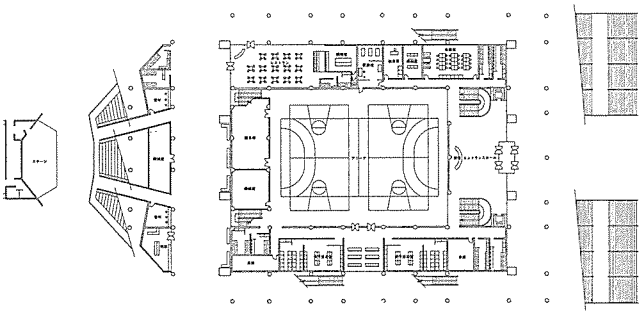
大村卓
OMURA Taku

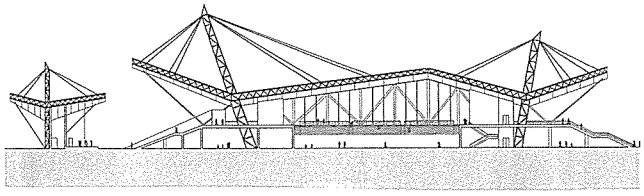
仙田：斜めの柱から釣るバタフライ型の屋根形態はリズミカルで、この場所に景観的なおもしろさを与えるにちがいない。野外劇場の提案はおもしろいが、舞台的な部分と座席部分がなぜ離れてないといけないのだろう。

木村：立体トラスの大屋根を、立体トラスの柱で吊る構造となっている。設計主旨には「水平方向の連続性を意識させる」とあるが、巨大なトラス柱にまず目がいってしまう気もする。

服部：スペースフレームと吊り構造による形態はなかなか躍動的である。特に大きく跳ね出した大屋根はサスペンションならではの迫力でアプローチや大階段を強く印象づけている。ただその割には主空間であるアリーナのスケッチが通常の体育館的でやや失望。むしろ野外劇場のアイデアを主体として考えた方が面白くなったかもしれない。







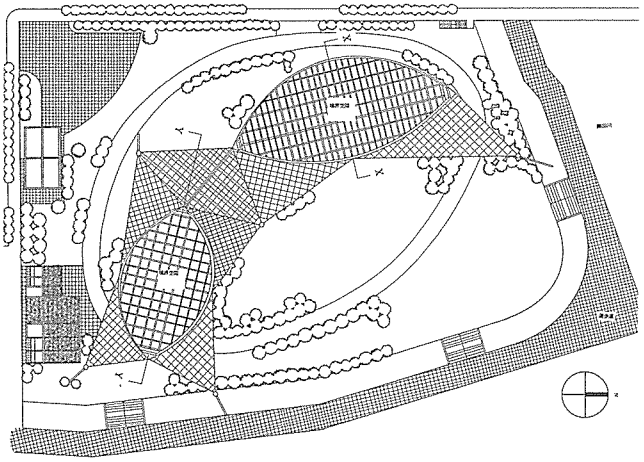
「大川端公園」
Okawabata park

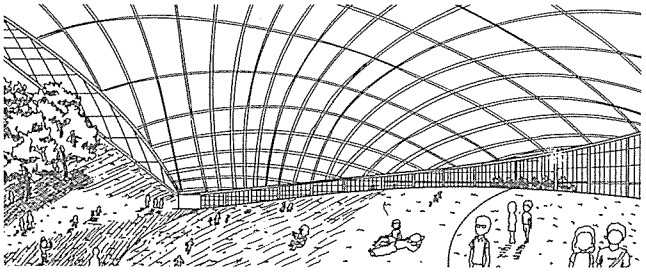
岡村航太
OKAMURA Kota

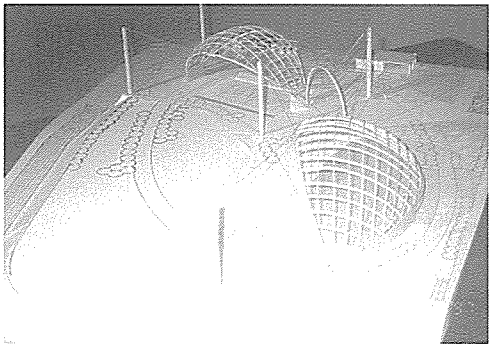
仙田：大きな屋根のある公園の提案である。ダイナミックで柔らかな屋根形態はここを魅力あるものに変えるだろう。大地の部分にもっと多様な空間計画がなされると良かった。

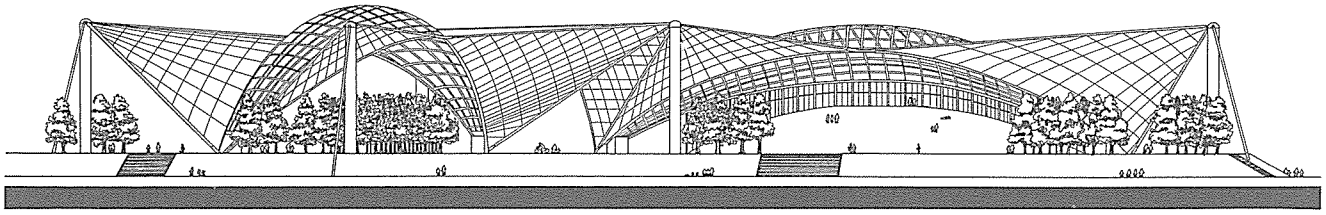
木村：「開かれた」大空間を構成しており、大屋根の構造にも、鉄骨シェルとケーブルネットを組み合わせるなどの工夫が見られ、興味深い建築となっている。また、敷地全体を活用した配置計画にも構成力の高さがうかがえる。ただ、内部と外部を明確に分けないとしながらも、「屋根の下」ばかりに注意を向けた設計となってしまった感もある。

服部：「公園」というコンセプトにより敷地全体を考え表現しようとする姿勢を評価したい。鉄骨シェルとケーブルネットからなる架構は自由で軽快なフォルムと用途を限定しない半内部空間を形成、心地よいレクリエーション環境となっている。それだけに本案では「配置図」が生命のはず、もう少し密度を上げて欲しかった。







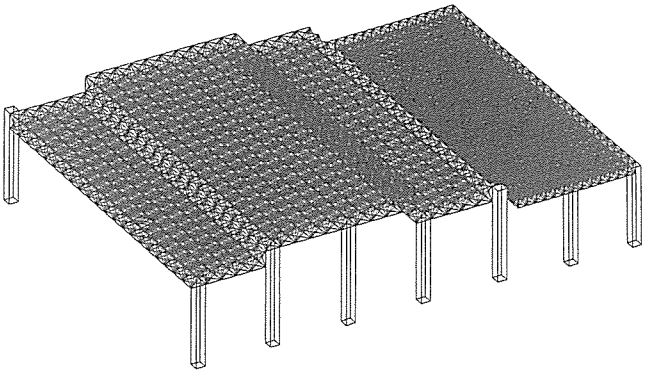


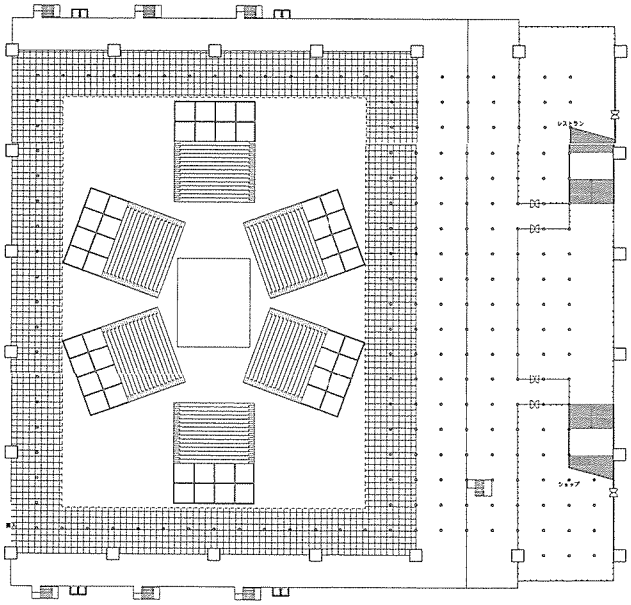
岡村案立面

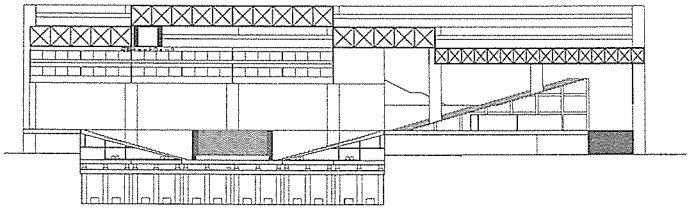
「FLEX ARENA」
Flex Arena

高橋寛
TAKAHASHI Hiroshi

仙田：多目的な、可変的なアリーナの提案である。屋根がさまざまなレベルで動き、下のアリーナの空間を活性化していくのがおもしろい。しかしそれらをとりまくサービス、休憩、管理機能の詰めが甘い。
木村：最近の大空間建築の実状に配慮した計画となっており、可変の空間を創り出すための整形な外形も納得できる。しかし、整形としなくても、このような計画は可能であると思われる。
服部：大空間は水平の立体トラスで構成されており、単純明快である。このアリーナは可動式のステージや客席で様々なイベントに対応できるというものだが、このままでは合理的ではあるが、超大型の体育館の域を出ていない。内部、外部とももう少し魅力が欲しいところである。



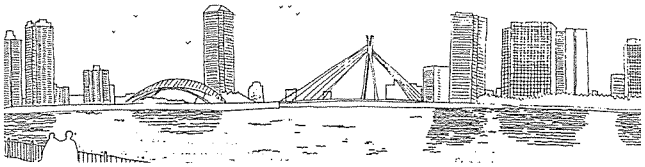


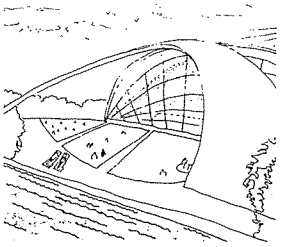


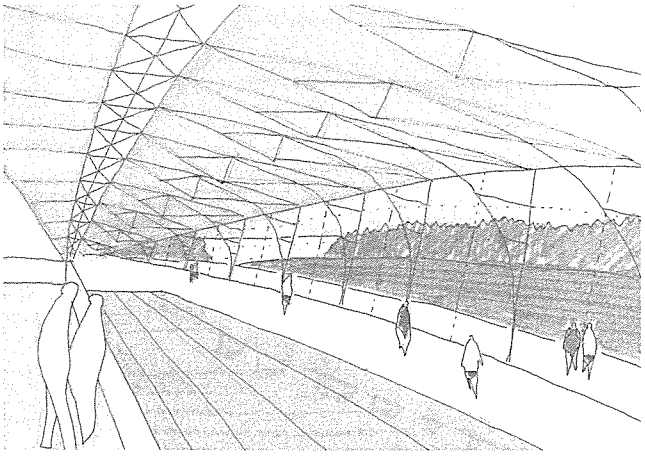
「Leaf 大川端アクアガーデン」
Okawabata aqua garden

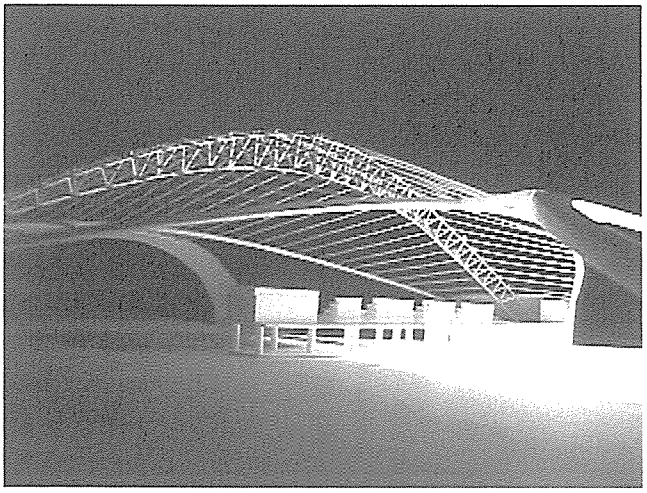
荒井拓州
ARAI Takushu

仙田：メインの屋根構成は最近よく使われている。ここでの新しい提案である外側の大きなアーチはもっと構造的に合理的に架けられるべきである。
木村：非常に大胆な構造システムとなっており、とても面白い作品である。風や地震などの外力を無視すれば、可能かもしれないが、立面図、断面図で見ると非常に不安である。
服部：敷地一杯にすえられた傾斜する二つの巨大なアーチは構造体というよりも都市や水際のモニュメントと見るべきであろう。それにしてもこれと大屋根＝木の葉のか細さとはいささか違和感があり、その接合部も構造的に不鮮明である。









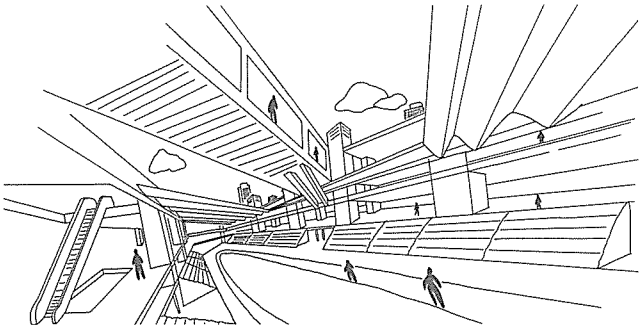
「オフィス＋大空間」
Office + huge space

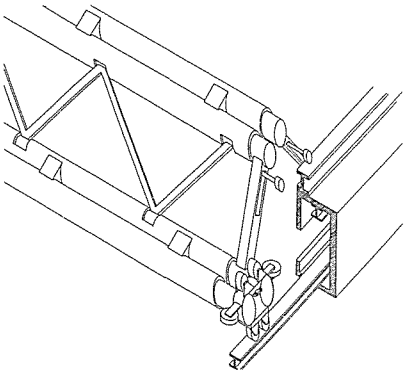
中島光平
NAKAJIMA Kohei

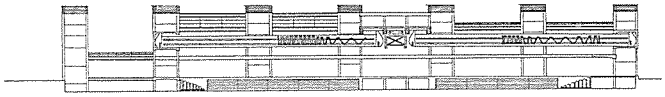
仙田：スポーツ等の企業の開発部門および商業部門とアリーナ空間を統合した提案はおもしろい。アリーナは実験場あるいはプレゼンテーションスペースの役割を果たす。ソフトの提案としてきわめて高い評価を与えられる。

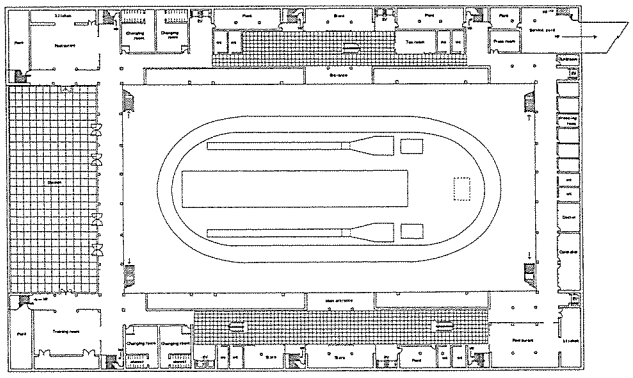
木村：この敷地に商業施設を計画している。構造でも、可動式屋根のディテールまで設計しており、計画に対する意気込みが感じられるし、図面表現のテクニックも高い。ただし、集客力のある魅力的な計画となっているか、また、屋根を可動式とすることの必要性など、十分に伝わってこないのが残念である。

服部：整形の平面計画の特性を生かしたスライド式開閉屋根（＝架構）にある様々な空間演出が可能なディスプレイスペースが特色。オフィス、ストアはその支持構造体としており明快なシステムである。オフィスとの複合という着眼も良い。









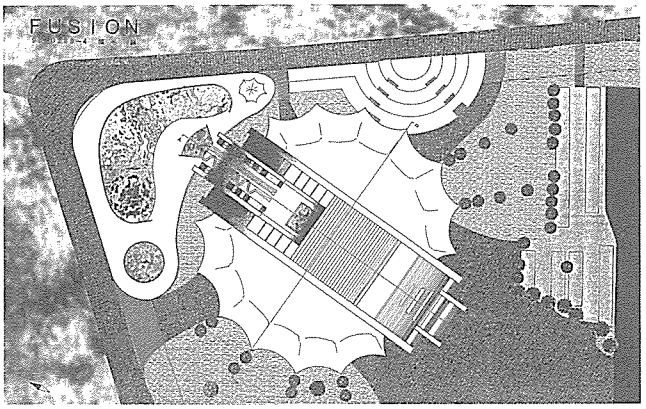
「FUSION」
FUSION

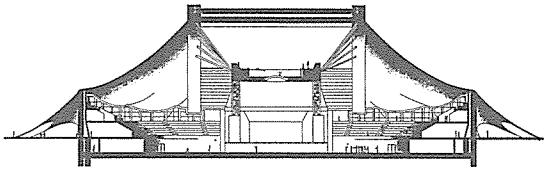
稲毛誠
INAGE Makoto

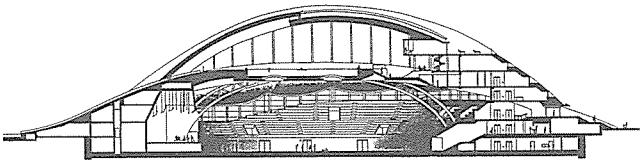
仙田：プールを大きな2つのアーチ状の梁から支え、その水のゆらぎを下のアリーナの空間にもたらすという、とてもファンタスティックな提案である。スケールが大きく、楽しい。現実的にはさまざまな問題があるが、逆転の発想、発明的な提案は高く評価したい。

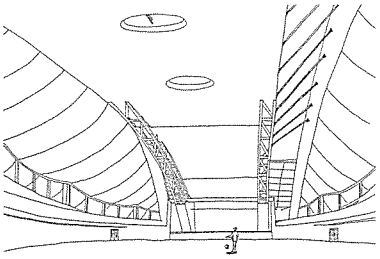
木村：「違和感」をキーワードとして、意外性のある設計となっているが、各部の計画などはしっかりと行われており、好感が持てる。アーチの断面は、贅沢すぎて非常に重厚な感じがしてしまっている。また、上部のプールまわりに、もう少し、眺望のためのスペース・施設を配置してもよかったのではないかと思われる。

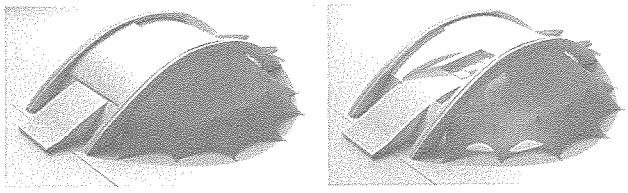
服部：宙吊りのプールについては何故重いものを持ち上げるのか、疑義が出たのは本人も認めており、それが狙いだと言っている。それよりもこのような立体配置により主空間であるアリーナの空間性が高められているかどうかが問題であろう。強固なダブルキールと可動屋根＋膜屋根というハイブリッドも議論が分かれるところだが、図面表現は最も緻密でよくまとまっている。





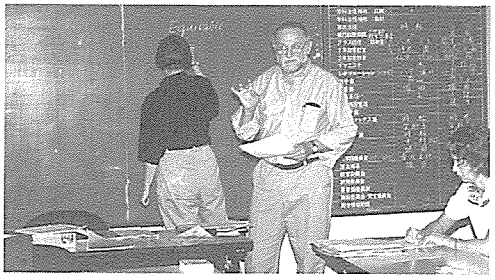






高齢者住宅に対するアメリカの事例
A Proposed American Model for Senior Housing

ロバート・ササノフ教授[ワシントン大学 建築・都市計画学部、建築学科]
Professor Robert Sasanoff (College of Architecture and Urban Planning, University of Washington)
サラ・レッケン教授[ワシントン州立大学 建築学科]
Professor Sarah Recken (School of Architecture, Washington State University)
和訳：三村大介[三村建築環境設計事務所] 小川次郎[文部技官]
MIMURA Daisuke (MALO), OGAWA Jiro (Reserch Associate)


講義中のササノフ先生(中央)とレッケン先生(左)

アメリカでは、人間の尊厳というものは家庭生活を通して養われるものであると広く信じられている。しかしながら、多くの高齢者は生理的、社会的、心理的、そして当然のことながら、とりわけ経済的な変化に直面せざるを得ない。生理的には、高齢者は体力、認識力ともに低下してしまっている。社会的には、家族や友人その他の人々からみた社会的地位や役割は悪化する一方となる。精神的には、老人がプライバシー、影響力、自立、安全、防衛、自尊心、許容というものを欲しても、彼らを役立たずで衰弱した、しかも経済的な重荷とみなす周囲の人々、にこうした欲求は退けられてしまう。経済的には、ほとんどの高齢者にとって交通費、家事、健康維持のための支出は増加するにもかかわらず、収入や貯蓄は減少していく。

高齢者は、今となっては購入することもメンテナンスすることもできなくなってしまった家で彼らの家族を育ててきた。その思い出は日常生活の活動に逆効果を及ぼすことになってしまう。屋内、屋外を問わず、高齢者が自分一人で簡単かつ経済的に行動することは難しくなってきている。孤独感、無力感及び倦怠感が高齢者の間に蔓延しており、このことは彼らの健康にとって致命的なことである。

もはや家庭は親しみあふれ心の支えとなる安全な場所ではないのだろうか？

これまでの一般的な見解では、高齢者の居住とは、
1) 高齢者を彼らの家に住まわせ、あたかも彼らは若い頃から何も変化していないかのように振る舞う
2) 友達や家族と離れた見知らぬ環境にある小さなアパートに高齢者を引越させる
3)老人養護施設に放り込み、まるで高齢者達が心身ともにもはや死んでしまったかのように扱う
のいずれかである。

「家庭」という認識を保持し、積極的に自尊心を維持するにはどうすべきだろうか？また、老人の自立心に適切な環境を通じてこのことを実現するためには、どうしたらよいだろうか？

Dr. William H. Thomasは彼の著作「Life Worth Living」において、ないがしろにされている人間のニーズとして
1) 交流に対するニーズ
2) 他人への気遣いというニーズ
3) 多様性に対するニーズ
の3つを挙げている。そしてこの3つの人間のニーズを満たし、老人ホームを首尾良く運営するため、Dr. Thomasは以下の3つの原則を挙げている。
1) 生物学的多様性は、動植物同様に人間の居住地にとっても好影響を持つ。
2) 社会的多様性は、実際の人間社会と同様に老人ホームでも大切である。
3)人間の居住地は、音楽や自然の調和に対するものと同様な献身が保たれなければならない。

Dr.Thomasが提示したChase Memorial Nursing Homeで起きた前向きな変化を示す驚くべき統計結果を見逃してはならない。この結果は老人ホーム以外の集合住宅にも適用できるのではないだろうか？これらの問題をユニバーサル・デザインの論理を通して理解することで、そのことが可能となると我々は確信している。

ユニバーサル・デザインとは、Polly Welchの定義によれば「使用者の多様性を認識し、年齢や能力のレベルに関係なく大多数の人が利用可能な環境や製品を創り出そうと努力すること」である。ここで、ユニバーサル・デザインとは現在そして将来において、価格や利益はもちろん、文化、時間、空間、素材、設備、家具をも含む「包括的な」意味を持つものであることを加えておきたい。

ユニバーサル・デザインは長期的に使用することで、より経済的なものに、また効果的かつ能率的なものになり得ると共に、過去の解決策を絶えず修正する必要性を減らすことができる。また、こうすることでより大きな需要にも応じることができる。Ronald M. Maceは、「3700万人以上のアメリカ人が体が不自由になる原因となりうる関節炎を患っている。また、少なくとも3600万人のアメリカ人が不治の身体的障害を有しており、そのうち1966年以来、重度の身体的障害を有しているものの割合は70%以上にも及ぶ。増加中にある65歳以上の人口において、46%以上が軽度もしくは重度の身体的障害を有している」と述べている。以上の統計および薬学や運動工学の絶え間ない発展は、設計者や建設業者は、一時的な身体的障害を含む、あらゆる世代の利用者を念頭におかなければならないことを示唆している。

ユニバーサル・デザインのアプローチとは、あらゆる製品、建築物、外部空間が全ての人にとって最大限便利なものとなるようにデザインすることに尽きる。ユニバーサル・デザインの特徴は、特殊な利用者のニーズに対しても容易にそして効率的につけ加えたり、取り除いたりすることができる融通性のある要素を含んでいることであろう。このような柔軟性をもつ設備と製品は、あらゆる人々が使用可能であることから、大きな市場となり得る。

あらゆる人に対して順応性をもつという特徴を有する建物は、建設業者と設計者による計画やコンセプト作りの段階で統合されてさえいれば、一般に従来の設計施工によるものより高価にはならない。経費のことばかり気にする建設業者や設計者は、各種の建設基準が政治状況にかなり左右されやすいことを認識しており、生涯生活に関わるコストを考えれば、住宅市場の産物である建売住宅を購入すべきであると顧客に進言するものである。(このことはアメリカの住宅においてはここ100年共通している。)

それでは、ユニバーサル・デザインを高齢者にとって有益なものとするために、Dr. Thomasの有意義な研究をどのように応用で

きるだろうか？

まず、将来居住者に体の支障が生じたときの利用の仕方を念頭に置いて設計を考えなければならない。次に現実的な費用の問題として、絶対的に必要となる費用はどのくらいか、また、短期、中期、長期的に付加されるものは何かを考える必要がある。生産物は柔軟性と順応性を持たなければならない。このことにより、万人にとっての住宅の実用的な価値が高まるだけでなく、住宅はより人道的で賃貸しやすく、かつ売りやすいものとなるのである。

老後を過ごすための単身者用住宅には、一般にあと3つの可能性がある。

1) サービススペースを共有するコミュニティを有する共同住宅(Co-housing)。

2) 他人と居住スペースを分け合う共有住宅(home sharing)。

共同生活の開始当初から合意がとれていれば、お互いの干渉に対して最小限の適応で済む。

3) かつてオフィスや小さなアパートであった建物の一部を間借りする方法。

経済的だが、平面を計画し直す必要がある(アメリカではまだオフィス空間を家庭用住宅の一部としてもつ建物は一般的ではない)。

計画段階において、改装に必要な費用を2つのカテゴリーに簡略化して分類することができる。

1) 固定的な要素：変更するためには多額の費用が必要となると共に、適切に計画すれば建物の核(コア)となる部分である。それらは例えば、エレベーターやダムウェーターなどの動線コアや構造コアなどの縦方向の要素である。

2) 可変的な要素：可変的な要素は次のように分類できる。

- 短期的費用を要するもの：高さの調節できるカウンター、流し、便座、クローゼットパイプ、鏡、照明器具、開口部に関わるものものなど。
- 中期的費用を要するもの：パーティション、可動倉庫、床材及び壁材、手すり、電気器具など、空間を規定するもの。
- 長期的費用を要するもの：部屋割りの変更、増築、室内の機能とレイアウト、サービスの運営とその内容、テクノロジー、温度調節、照明など。

「固定的なもの」と「可変的なもの」という分類と、「当初の利用者」と「将来の利用者」という分類に沿って住宅の平面を計画することで、住宅に関する様々な問題点を、建築的な特徴、空間、費用の面から計画する上で対処しやすいフォーマットに容易にのせることができるようになる。このプロセスはモジュラーユニットとして建築物を検証するときにもあてはまる。

固定的な部分は建物に必要な構造部に利用することができる。この固定的な部分に、キッチン、風呂、階段及び縦ダクトを含むこともできる。固定的な部分は、他の空間やサービスへの改良により柔軟に対応できる。そしてこのゾーニングを、「当初の使用者」と「将来の使用者」の分類によるゾーニングと重ねて考えることで、建物の耐用年数、構造方式、サービス、利用者、そこでの活動、材料を含めて建物を構想し始めることができるのである。これは複雑な問題に対する初歩的な見解だが、人道的、かつ費用を考慮にいれたプロセスにおいて生涯居住の問題を考える上での、ひとつの方法であるといえる。

最終的には身体的弱者が住むことになる単身者用住宅における調整と改造の例：

- 配置計画：駐車場のある緩斜面は建物のエントランスに適している。

自然の地形を利用したスロープは、地面から独立した斜路よりも好ましい。ループした小径の利用は痴呆症の人の治療に役立つ。小径の色や材料は一様にすべきである。庭やコートはしっかりとした座るスペースをもつ小さなエリアに分割し、光や風から保護するとよい。これらの空間は建物の内からも外からも見通しがよくなければならない。

- 空間計画：玄関ホールや浴室、台所は車椅子に便宜を図る。一般的にアクセシビリティに対して意識的に計画された空間は、大きすぎ、単調かつ拡散的なものとなる傾向がある。居住性を増すためのあらゆる快適性を考慮すると共に、建物正面の端部にアクセスするように計画することが望ましい。椅子、テーブル、装飾やモールディングなど。ホールや台所などの共有空間における小さな奥まった場所やアルコーブは、休憩したり、景色を眺めたり、本を読んだり、気分転換したりするための私的な場所として使用できる。色、材質、ディテールもしくはパーティションを用いてこれらの場所を境界付けることができる。
- エアーカーテンのある入口にすることで、網戸や雨戸が組合わされたドアにつきものの二重ドアをうまく機能させるため、複雑な操作を避けることができる。こうした場所は、建物内外の光の状態の変化に目を慣らす空間としても都合良い。
- 避難が偶然に頼ることがないよう、オペレーター付きの窓は、現在及び将来の避難規則に準じて固定できると良い。窓はできる限り大きくして、日射熱を取り入れるようにすべきだが、グレアによる障害に注意を払う必要がある。
- 後に手摺を取り付けるための壁の間柱は、現在もしくは将来使用することになる電気配線を隠すためのきちんとしたディテールを造るのに都合がよい。電気技術が進歩した際には、この装飾の背後で容易に対応することができる。
- 折り返し階段や踊り場を設けることで落下による怪我を防止できる。活動的な居住者にとっては、踊り場は植物を飾ったり、景色を眺めたり、本を読んだりする場所になるかもしれない。階段の頂部、中程、底部の余分なスペースは、最終的には機械的なリフトのための場所となるかもしれない。階段や収納の空間は将来はエレベーターに変えることができる。
- 室温調整：電熱線を床に張り巡らすことで、室温を簡単に上げることができ、部屋は画期的に快適なものとなろう。
- ハードウェアと材質：ドアや蛇口のレバーハンドルは、今や居住者が容易に選択することができる。

ライフサイクルにおける変化に応じた2種類の「家族(当初の居住者／将来の居住者)」に適応するよう最初から建物を検討することで、住宅の魅力や価値を向上させる潜在的な能力を持つ物理的・経済的な柔軟性が得られるのである。

- 東京工業大学大学院建築学専攻とワシントン大学建築・都市計画学部建築学科の間で行なわれている、教授交換制度を利用して来日されたロバート・ササノフ教授により、1997年10月15日から11月12日まで、建築空間論(Theory of Architectural Space)と題する大学院の集中講義が開かれた。このコラムはその時の授業の内容を伝えるものである。

学生を交えた懇親会

ニュース・投稿
News/contributions

ワークショップ
Workshop

日米学生交流模型作りワークショップ
Modeling workshop for sutudents exchanged between Japan and America

松風荘について
About "Syofuso"

中山伸[修士2年]
NAKAYAMA Shin (M2)

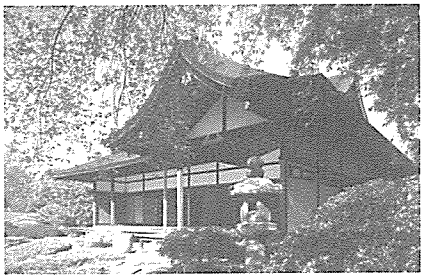
アメリカのフィラデルフィアに「松風荘」という一軒の書院造が建っている。この建物は、1954年にニューヨーク近代美術館(以下MoMA)の中庭に建設・展示された後、この地に移築されて現在に至っているものである。その建設の趣意書には「日米両国文化交流に力強い示唆を与えかつ将来永く保存されることになれば日米両国友好の歴史に記される意義はきわめて大きなものがあると信ぜられます」とあるが、半世紀近くを経た現在もその役割を果たしている。

松風荘の建設計画は、1950年に渡米した本田親男毎日新聞社長に、ロックフェラー三世が日本住宅を展示したいという希望を伝えたことからはじまった。ロックフェラー三世は慈善事業や文化交流に熱心で、MoMAの名誉総裁でもあった。MoMAでは1949年から"House in the Garden"という、MoMAの中庭に近代的住宅の実物を展示する一連の企画展を行っていたが、日本の伝統的な住宅の構造やスライディングドアなどが近代主義建築に似ていると考え、その展示を企画したのだった。計画の中心になったのはフィリップ・ジョンソンで、計画の実施には当時25歳の建築主事、アーサー・ドレクスラーがあたることになった。計画は1953年2月にドレクスラーとロックフェラー三世夫妻が来日してから、急ピッチで具体化していく。浜口隆一や吉村順三の案内で京都を中心に古建築を見学したドレクスラーは、東大教授で日本建築史の大家である関野克の示唆によって、展示する日本住宅を園城寺光浄院客殿をモデルとする書院造に決定する。神社や数寄屋造を日本建築の代表とする考え方が支配的だった当時、書院造をもって日本住宅建築を代表させた背景には、関野らによって行なわれていた書院造や木割についての研究の成果があったと考えられる。そして、その設計者にはアントニン・レーモンドに付いてアメリカで仕事をした経験がある吉村順三が選ばれた。考証は関野に依頼されたが、実際には関野研究室で木割を研究し、堂宮大工の名門の家系である伊藤要太郎(現12代伊藤平左エ門)が吉村の補佐にあたることになった。

吉村は光浄院客殿をモデルに松風荘を設計することになったが、完成した作品は決して単なるコピーではなかった。平面をくらべれば、松風荘のほうが小さく、別棟で台所と茶室がつけ加えられていることに気がつく。また床・棚・書院の位置がことなる。おそらくは一つの住宅として機能しうることや、展示のための動線の確保といった、機能に対する発想からの変更であろう。また、細部意匠においても懸魚や舟肘木のような装飾が簡略化もしくは省略されているが、これは非近代的要素を排除するという意向の反映といえる。光浄院客殿の広縁を高く評価していた吉村は、松風荘において更にその空間を純化して表現した。光浄院客殿の上段書院を省略したのは単に動線の確保というだけではなく、庭から広縁、座敷への空間の連続性を重視し、開放的な広縁を実現するためであり、吉村の美意識を反映した操作なのである。

1954年6月19日から公開されたこの日本住宅の展示は非常に好評で、マスコミも好意的に取り上げ、入場者は12万人を超えた。

MoMAでの展示を終えた後、松風荘は1956年にフィラデルフィアのフェアモントパークに移築され、アメリカに日本文化を紹介する拠点としてはたらいてきた。しかし、1976年に行われた最後の修理から20年、再び多額の資金と高度の技術が必要とされる屋根の葺きかえの時期になっている。



松風荘外観 ©藤岡洋保

ワークショップについて
About Workshop

塩見理絵[修士2年]
SHIOMI Rie (M2)

現在、松風荘は地元のボランティア団体(松風荘友の会)の活動によって維持されている。そこでは定期的にお茶会や日本文化のお話会などが開かれ、日米交流の場として地元の人々に親しまれている。「日米学生交流ワークショップ」はその文化交流活動の一環として企画され、国内から14名(うち東工大3名)の学生が参加し、昨年の8月26日より約10日間にわたり、ペンシルバニア大の学生と交流をはかりながら模型づくりを行った。製作模型には松風荘をはじめ、そのモデルとなった光浄院客殿、日本住宅の典型例として庄屋、武家、農家が選ばれた。そのなかでも松風荘と光浄院客殿の模型には、両者の相違を全面的に表現するために特にエネルギーがそそがれた。フィラデルフィアでの作業はフェアモントパーク内の建物で行われ、友の会のメンバー、ホストファミリー、ペンシルベニア大の学生、ふらっと立ち寄った旅人など多くの訪問者に説明しながらの作業となった。地元の学生の中には、三島由紀夫が好きで、ちょっとくせ者な東洋文学専攻の男子学生や、日本の桂離宮を絶賛しつつも、模型づくりには「TINY WORK !」と感心するだけで興味を持たなかった女学生など、少し面食らってしまう人たちもいた。しかし、ほとんどの人が日本建築に関心を示しており、私たちの説明に真剣に耳を傾けてくれた。説明は大変。日本建築の部材や家具の名前を知っていたとしても、その内容をきちんと理解していないと説明できない。「付け書院」「帳台構」「部戸」など細部にまで名前が付けられている日本建築の強みもここでは無効である。書院が何によって構成されているかではなく、何をするところなのか、なぜその家具や部材が生まれてきたのか、そこから説明しなければ地元の人たちには伝わらない。そうすることで、普段の自分の話し方がいかに曖昧であるかに気付く。このことは、私たちが染まりつつある受け身の思考パターンを一旦洗い流してくれた。

模型づくりの合間にフィラデルフィア市内を歩いた。2つの川に挟まれたこのまちは、程良い規模でコンパクトにまとめられている。まちのコンセプトはRENEW。壊して新しく作り替えるのでもなく、壊さずに付加するのでもない。おそらく部分的に壊しながら、新しいものを滑り込ませ用途を可変させるということなのだろう。まちを見渡してみたところ、外観を継承し、インテリアを改装した建物が多かった。多種様式が混在し、都市形成のプロセスが垣間みられるこのまちは、時間的な変化を感じさせる建築博物館のようであった。

こうした散策や楽しいイベントを合間に入れながら、多くの人々の協力のもとで模型は完成し、贈呈式の日を迎えた。

日本に帰ってからアルバムを開く。すると、たくさんの模型や建物と一緒に、いるいる、中央に生き生きしたメンバーたちの顔が……。現地の建築をみて感動している顔、お茶会で緊張した顔、模型の作り方で悩んだ顔、ホストファミリーと打ち解けたときの満面の笑み……。建築よりも、それを見ている人の表情から感動が伝わってくる。建築の素晴らしさは、その建築がどれだけ人にはたらきかけ感動させるかであり、松風荘は国の違いを越えてひとりひとりの架け橋となってくれたのである。この企画を知った吉村順三氏は「あの建物は幸せだなあ」と言ったそうである。私の方こそ感謝したい。松風荘のお陰で多くの人と巡り合い、楽しい思い出をもらった。これを機に、またひとつ建築の楽しみ方が増えた。

ワークショップ風景

世界の建築教育
Architectural educations in the world

ロンドン大学バートレット校に留学して
My experience at Bartlett school, London University

小山光[平成10年3月修士卒、スタジオ・コー主宰]
KOYAMA Akira (studio ko)

[イギリスの建築教育]

ロンドン大学は様々なカレッジの集合体で、そのほとんどは大英博物館の裏のブルームズベリー地区に集中しており、バートレット校もその一角にあります。バートレットはいわゆる建築デザインだけの学校ではなく、他にも都市計画や環境工学などの学校と一緒になっています。日本のようにまず建築学科に入学してから、構造、設備、計画などと専攻を選択するのではなく、イギリスではデザイナーとエンジニアの職分がはっきりしているので、全く別の学校として成立しています。

イギリスにおいて建築家の資格は、RIBA(英国王立建築家協会)のメンバーになることとイコールです。そのプロセスは、①3年間でプレディプロマ取得、同時にRIBAのPart1を修了。②1年間の実務経験を経てもう一度学校に戻り、残りの2年間でディプロマを取得し、Part2を修了。③その後2年間の実務経験を経て、Part3の筆記試験に受かれば、晴れて建築家。このディプロマとプレディプロマの学校は必ずしも同じ学校に行く必要はなく、試験にさえ受かれば、学校間の移動は自由にできます。最短でも8年間ですが、もっと時間がかかるのが現状のようです。

バートレットの場合、2年生以降ユニット(研究室のようなもの)に所属し、ユニットマスターの指導のもとに課題をこなしていきます。年度の初めにユニットの説明会があり、自分の希望をだしてそれぞれのユニットに割り振られていきます。また毎年ユニットを変えることもできます。バートレットのユニットの傾向としては、建築が動いたり、建築の定義を広義にとらえるところが多く、さながらアートスクールのようです。

[バートレットのマスターコース]

私が入学した建築マスターコース(MArch)は、4年前に新しく設立されたコースで、RIBAのカリキュラムとは独立しています。プレディプロマやディプロマでは各ユニット10数人からなる20以上のユニットがありますが、MArchは私のいた年で20名弱。MArchのチューターはピーター・クックで、ピーターのユニットとも言えます。メンバーはギリシア、ドイツ、フランス、ボスニア、ポルトガル、他にはアメリカ、インド、タイ、台湾からとかなり国際的なクラスでした。日本人は私一人で、学校全体で見ても、日本人の割合はあまり多くありません。私の年にはMArchにはイギリス人が一人もいませんでしたが、翌年には何人かいたようです。ディプロマという学位自体が日本の修士に相当するので、それからさらにMArchに行くというのはあまりポピュラーではないからです。

MArchは12カ月のコースで、前期は比較的小さな課題を3つほどこなし、後半で論文を含めた修士設計を仕上げ、最後の試験(全ての課題をプレゼンテーションしたポートフォリオを提出する)にいどみます。小課題のうちのひとつでは、生徒全員でスタジオツアーに行きます。私の年はフランクフルトの学生や、ウィーンの学生とともにロッテルダムに行き、オランダのランドスケープについてのプロジェクトに取り組みました。このように他の学校と課題をシェアするのは、ピーターの今まで培った人脈のおかげです。

修士設計は、設計とそれと関連した論文を提出します。設計の期間としては6カ月あるのですが、まず何をどうとりあげるかをなかなか決められないので、私は旅行に行ったり、RIBAの学生コンペに友人と一緒に取り組んだりしていました。最終的には、今も中世の城塞が残るコペンハーゲンの都市計画に絡め、橋の複合施設を設計し、論文は建築のスケールについて書きました。

[ピーター・クックの教育方針]

他の生徒の修士設計にはイギリスの海岸のランドスケープを扱ったものや、小説などのストーリーを建築化する設計手法を呈示したもの、ロンドンの高速道路を利用した複合施設や、ボスニア紛争で破壊されたサラエボの国立図書館、スペインの闘牛場、飛行船のように世界中を移動する美術館、特殊ガラスを利用した住宅施設など、とりあげられた内容も、建築の捉え方も様々でした。MArchではピーターが生徒に好きにやらせているので、みんなアーキグラム風になるようなことはなく、逆になんの束縛もないのでやりにくいほどでした。

課題ごとにある講評会とは別に、だいたい週1回ほどチュートリアルがあり、ピーターと2人の助手にアドバイスを受けます。しかしピーターは毎回言うことが異なるので、彼の意見を鵜呑みにすると自分を見失しないがちになります。ある意味ピーターは「鏡」のようなもので、「自分はこれがやりたいんだ」という強い意志がないと、何も得るものがありません。鏡の前でボーと待っていても何も起こらないということです。実際、そのために脱落していった学生も何人かいました。

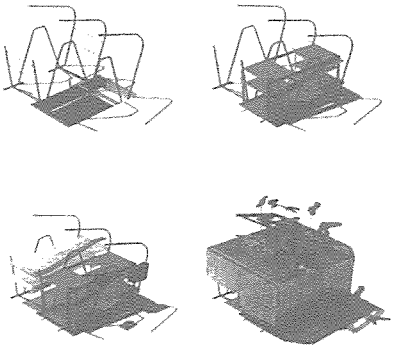
[ロンドン就職事情]

バートレット卒業後は、そのまま東工大の修士に戻ろうと考えていましたが、コースが終わったのが10月だったので、3月までイギリスで働いてから日本に戻ることにしました。イギリスはかつてない好景気で、建築業界も比較的にぎわっていました。もちろんフォスターやロジャース、グリムショーなどの事務所は人気が高く、就職はなかなか難しいようです。私は幸いシンガポールの建築家で、イギリスにも事務所を持っている、ケイ・ニー・タンの事務所で働くことができ、いくつかの実施コンペを担当することができました。学生の時とはまた違った視点でイギリスの建築界を見ることができ、ここでの仕事は非常に良い経験になりました。

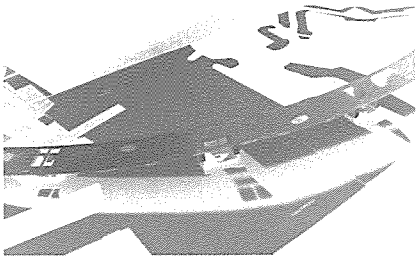
[留学によって得られるもの(与えるもの?)]

正直いって私の場合、決してバートレットに満足していたわけではありませんでした。ただそのことによって身に付いたのが、自分の意見をしっかりもって、主張することです。ピーター・クックと私では、建築に対する考え方が全く異なりましたが、主張することによって、はじめて共通点を見出すこともできます。

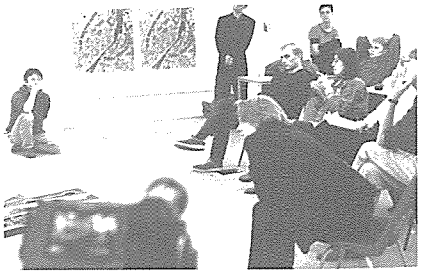
情報化が進んだ現在、日本にいてもある程度世界の建築の状況がわかるので、留学によって建築の最新情報を得るわけではありませんが、そこには生活体験によってのみわかる日本と異なる文化があります。武道家が己を知るために道場破りをするように、留学によって自分を再確認し、あわよくば、自分の考え方を布教しちゃおうというスタンスがいいんじゃないかと思います。



Print Room of the Future, RIBA Student Competition
Sponsored by Sarkpoint, 1st prize, Judge/Nicholas Grimshaw



Master Thesis Project with Distinction,
Copenhagen Fortress Bridge



講評会風景

コンペ
Competition winners

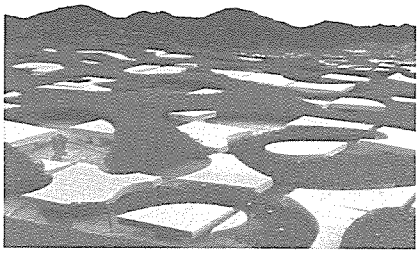
第7回エス・バイ・エル住宅設計コンペ
「ミース・ファン・デル・ローエの家」(新建築9707)
House of Mies van der Rohe
Lake Shore Drive Apartment REMIX
＝都市の棚(Urban Shelves)

[佳作]
山口由美子[修士2年]
三村大介[三村建築環境設計事務所]
YAMAGUCHI Yumiko (M2), MIMURA Daisuke (MALO)

この住居群は、レイクショアドライブ・アパートメントを現代の都市生活者に対応すべくミースの理念を再解釈することによって再編集したものである。都市からサンプリングされたテクスチャが各スラブにマッピングされ積層化することで、それは「都市の棚」となる。そこに住む人々は自身が望む「棚板」を選択し住戸を獲得する。多様な住戸が「都市の棚」を埋めていき偶発的で多彩なファサードをつくり出すことでそれは立体都市の様相を呈する

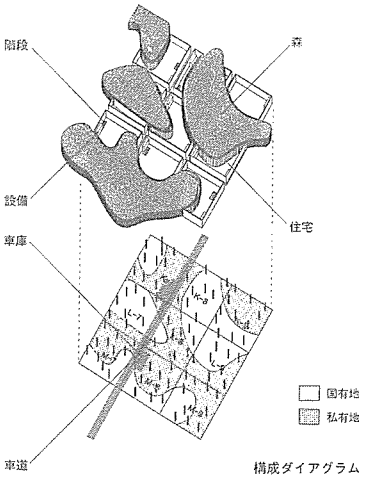
播磨科学公園都市
近未来戸建住宅デザインコンペティション
(新建築9708)
Design competition for future house

[一般部門最優秀賞]
小山光[スタジオ・コー] 安森亮雄[博士1年]
繁昌朗[フォルムシステム] 黒田潤三[フリー]
KOYAMA Akira (Studio Ko), YASUMORI Akio (D1),
HANJO Akira (Form System), KURODA Junzo (Freelance)



森の戸建分譲住宅：グリッド－森＝戸建住宅
多様な住宅を生み出しつつ、森を保存する宅地造成法。
1. 森量保存の法則に則り、木の生える場所を移し変えながら敷地を形成
2. 敷地にグリットを重ねる
3. グリットの中で森の部分は国有林であり、購入者は残余部分にのみ、建築を建てることが可能

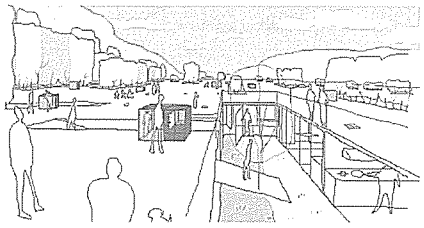
この手法は、自然 住む場所、公共の土地 私有地などの制度化された分節の、新たなありかたを提起している。

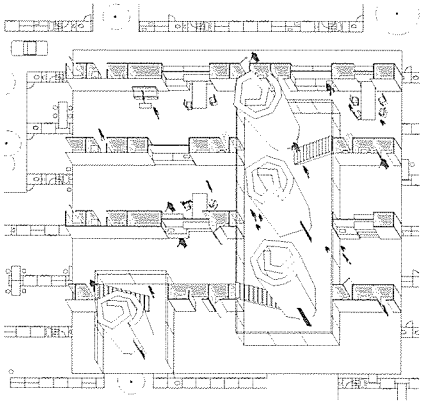


構成ダイアグラム

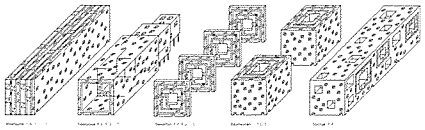
[学生部門優秀賞]
増山絵理奈[修士2年] 塩見理絵[修士2年]
MASHIYAMA Erina (M2), SHIOMI Rie (M2)

敷地は、緑に覆われた丘陵地帯で兵庫県が開発中の科学公園都市。住居の余白として緑が残されるのではなく、緑に切り取られた余白が住居であるような開発を考える。住居と対等な立場の緑の群＝ブッシュは道から山へスケールが連続するように徐々に大きくなり、山に向かって均等に配されたライフラインとによって敷地は奥行きの違う住戸群に分節される。ライフラインは、ブッシュの水分を調整すると同時にニンゲンにインフラを提供し、ブッシュを介して別々に棲む家族や個人の多様な生活スタイルを導く。





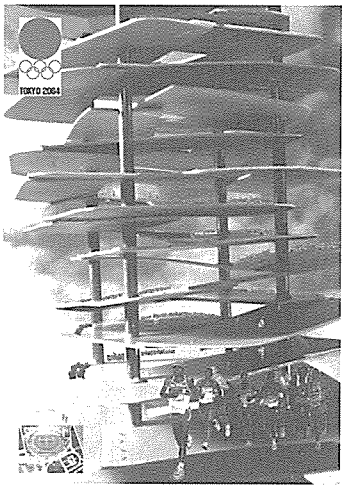
[学生部門入選]
美濃部幸郎[博士2年] 久野靖広[修士2年]
MINOBE Yukio (D2), KUNO Yasuhiro (M2)



第32回セントラル硝子国際設計競技
「ミレニアムタワー」(新建築9711)
Millennium tower

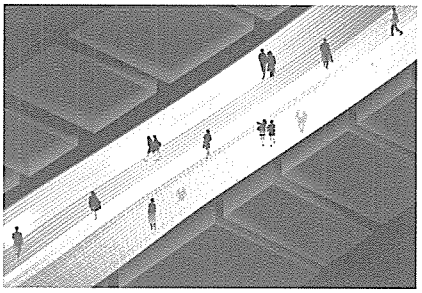
[入選]
小山光[スタジオ・コー] 米津正臣[修士2年]
小野田環[修士2年] 神原栄男[清水建設]
KOYAMA Akira (Studio Ko), YONEZU Masaomi (M2),
ONODA Tamaki (M2), KANBARA Yoshio (Shimizu Corporation)

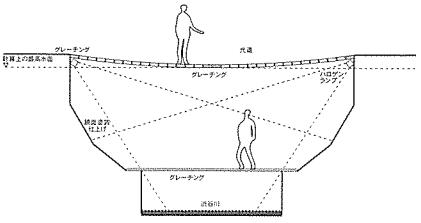
この案は国立競技場の脇に建つマラソンのためのタワーで、床を螺旋状に連続させることにより、42.195kmの距離をそのまま垂直化したものである。このタワーは外部空間のみで成立しており、構造的には、吹き抜ける風を揚力に変換することで安定をはかっている。一等には月に刺さった巨大モニュメントが選ばれたが、我々の案はモニュメンタルな建築や、スラブが単調に積層した高層ビルに対する批評を込めている。



第4回空間デザインコンペティション
「都市の中のガラスブロック」(新建築9712)
Glass Blocks in the city

[銀賞]
岡本浩[村田靖夫建築研究室]
OKAMOTO Hiroshi (Yasuo Murata Architect and Associates)



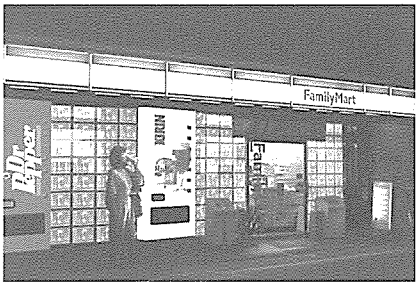


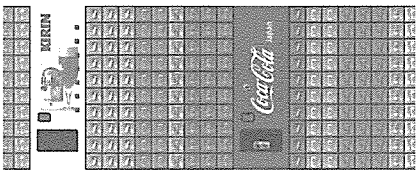
都市の「際(きわ)」におけるガラスブロックの新しい使い方が求められた。渋谷駅から代官山周辺までの渋谷川上に、連続する歩行者空間として緑道ならぬ「光道」を提案した。ワイヤーを格子状に張り

渡しガラスブロックを挿入、隙間をエポキシ樹脂で固める。「光道」下部は通常の水量時のみ通行可能で照明装置を設置、擁壁には鏡面塗装を施すことにより、水面の揺らぎを「光道」上面に投影する。都市の賑わいとともに光も流れる川である。

[佳作]
田口陽子[修士2年]
TAGUCHI Yoko (M2)

ガラスブロックを用いることによって自販機と建築(壁)を融合したものがVENDING WALLである。そのガラスブロックの光はその日の商品の売れ行きによって変化し、都市に集まる人々の行動が建物の表情へと反映されるように仕組まれてある。また、壁としてだけでなく、都市のあらゆるスキマを埋め尽くし、街中の憩いのあかりとなることであろう。

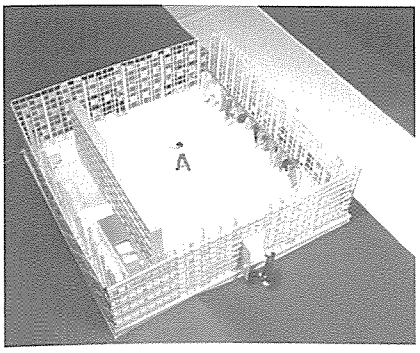




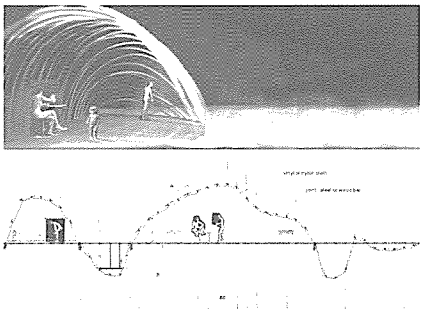
建築学生・設計大賞'97
「装飾された家」
House with decoration

[優秀賞]
安森亮雄[博士1年] 野村陽子[修士1年]
YASUMORI Akio (D1), NOMURA Yoko (M1)

この住宅は4つの「装飾される壁」でできています。
•ロールブラインド・ウォール：外周は30cm角のロールブラインドで覆われ、上げ下げにより内外の関係を制御し、壁面には様々なパターンが描かれます。
•マド・ウォール：内壁の回転するガラス窓で、内気 外気を制御します。
•ハンガー・ウォール：季節の色の服を掛ければ、季節の色の壁になります。
•タナ・ウォール：モノの置き方で水まわりとの視線をコントロールします。

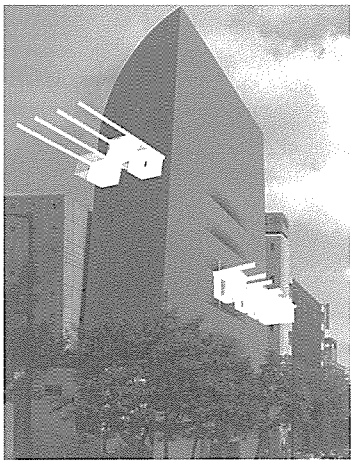


[優秀賞]
伊藤立平[修士1年]
ITO Tappei (M1)



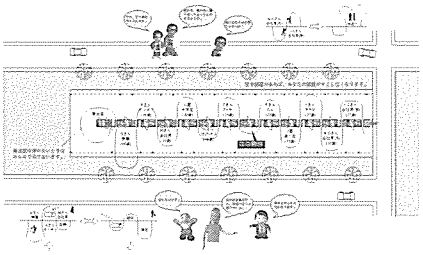
[優秀賞]
辻内理枝子[修士2年] 池野啓悟[名古屋大学大学院]
TSUJIUCHI Rieko (M2), IKENO Keigo (Nagoya University)

「生活は装飾である」
ビルに寄生した各住戸ユニットは、中で生活する人の活動によってその形を変化させる。ここでの形の変化は生命活動の表れでもあり装飾でもある。ビル本体は寄生した各住戸ユニットとその変化により装飾され、住戸はビルの一部となることでビル全体としての装飾に組み込まれる。「部分」としての住戸がビルという「全体」を装飾し、さらにその一部となることで装飾し装飾されるという相互補完が起こり、装飾が完成する。



第3回リビングデザイン賞
「現代風長屋・共生の家」
Modern tenement houses/House for symbiosis

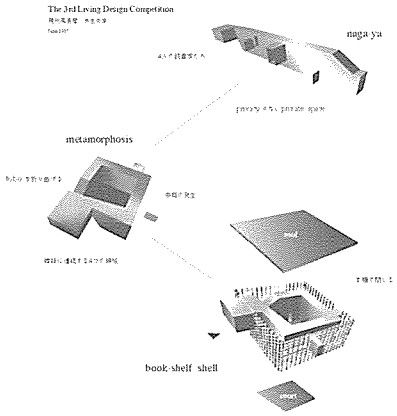
[奨励賞]
田口陽子[修士2年] 浦橋信一郎[修士2年]
TAGUCHI Yoko (M2), URAHASHI Shinichiro (M2)



「ベルトアパートメント」では、可動式の長い長いベルトのような壁を設けることにより、住人どうしのやりとりを活発にすることがねらいです。
•しばらくいえを空ける間、誰かに貸したい。
•友達を泊めるのに、スペースが欲しい。
などという日常のちょっとした願いが、隣のいえへとつながる「ベルト」を動かすだけでかないます。そして、この「ベルト」による様々なやりとりは、そのまま建物の表情へと反映されるのです。

[選外]
笠井誉仁[修士2年] 中谷豪[修士2年]
長岡真由美[山本理顕設計工場] 神谷明子[清水建設]
KASAI Takanori (M2), NAKATANI Go (M2), NAGAOKA Mayumi (Riken Yamamoto & Field Shop), KAMIYA Akiko (Shimizu Corporation)

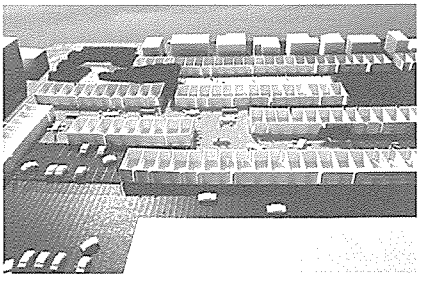
これは、4人の読書家の住む家である。構成は、共有スペースの周りに個室の回廊(チューブ)、その外に本棚の回廊(殻)を巡らせ、二重回廊となっている。チューブは、折り曲げ、スラブを差し込むことで、各人の領域が曖昧に分節される。回り込んで玄関の上に突き出たチューブの最奥は、リビングとなる。曖昧性、階層性は、昔の長屋に対応させた。



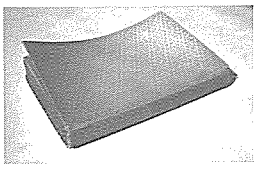
ユニオン造形デザイン財団「街・築く」
Town/Build

[準奨励賞]
米津正臣[修士2年] 小野田環[修士2年]
山口由美子[修士2年]
YONEZU Masaomi (M2), ONODA Tamaki (M2), YAMAGUCHI Yumiko (M2)

様々なコンテクストが重層している現代の街において、そこに新たな文脈を加えてしまうような建築のつくり方では、批評能力のある建築は築けないと考え、隣接する道やレストラン、公園、駐車場、スーパーマーケットといった周辺環境を、外部空間としてそのまま敷地に連続させることで、建築の配置、ヴォリューム及びプランを街との直接的な関係から決定する集合住宅を計画した。それぞれの住戸は、性格の異なる2つの外部機能に面し、パブリックとプライベートの結節点となって街を活性化させる。



「清らかな意匠」谷口吉郎 著



身の回りの小さな意匠

Small designs around us

中谷豪[修士2年]
NAKATANI Go (M2)

1929年に発表された『コルを掴む』においても、ル・コルビュジエへの傾倒を表明した谷口吉郎は、翌1930年、『ル・コルビジェ検討』においてそれまでとは一転し、ステレオタイプ化してしまったモダニズムの先達の建築を嘆き、これ以降モダニズムとの距離を意識的にとることになる。1948年に出版されたこの『清らかな意匠』においても、谷口は様々な視野からモダニズム及び自らの思考を検討し、独自の意匠論を展開している。

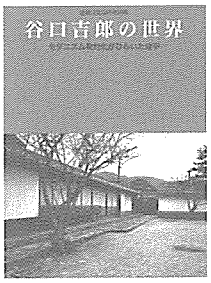
この本の中で谷口は、フロシキ、ミカンの皮、旗といった身の回りのありふれたモノを例にあげて建築意匠の問題として意見を述べている。実用性と用即美を兼ね備えたモノとしてフロシキをあげ、このフロシキは我々の民族の造形的センスが生み出したものであると言う。その時代の美的性格を代弁している日常品に美の基準を見いだすことができると言うのだ。またミカンの皮と建築とのアナロジーを用いて建築の構造と造形に関する論(ここでは特にシェル構造やトタン張の藁屋根について)を展開している。「私はミカンの皮の意匠につくづくと感心してしまう。それは構造学的にも、熱学的にも合理的であるばかりでなく、造形的にも美しい。そんなことを考えて、私はミカンの皮の如きものにも、わが意匠心が浄化されるのを感じている」と。さらに、旗についての一節では今日の芸術品の中に旗のような簡明で強い表現力をもったものを見いだすことができないのは諸芸術が義絶状態にあるためであると指摘する。こうした身の回りのささいなモノに対する思考によって建築を相対化していくという態度がこの本を通じて示されている。

精神分離症と診断された人が設計した二笑亭という建物を訪れた時の感想の中で谷口は「二笑亭の建築は決してでたらめの建築ではなく、むしろ強い意匠心を持っている。美を求めてやまぬ独創力が、努力を重ねた建築と言いうる」と、作者の意匠心に感心している。この意匠心という言葉は、この本の中で繰り返して用いられる谷口の造語であるが、この言葉に谷口は伝えたかったことのすべてを託したのだと思う。二笑亭の造形は表現派的、構成派的であり、谷口が批判的に捉えていたモダニズムの形骸化と同じ図式を思いださせるものであった。そのことに対しては異様なまでの嫌悪感をうったえているが、しかしそれにもまして、二笑亭の建築は意匠心のたまものであったのだ。このことは谷口に大きな動揺をもたらす。フロシキや旗のような美しいものによって自らの意匠心を刺激されてきた谷口にとって、この日の出来事は衝撃的なものであったに違いない。二笑亭から帰った夜、谷口は郷里の金沢から持ってきた古九谷の皿を取りだし、そこに清らかな意匠心を感じ、自身の心の動揺を沈める。

最終章である『建築の意匠』において谷口は「建築の意匠とは」という問題に、建築歴史学、建築美学、建築設計学、構造工学それぞれの充実と、それらを相互連結させるための意匠の統率の必要性という内容で、自身の考えをまとめている。二笑亭で揺るぎはしたものの、やはりこの統率の論理こそが谷口のいう意匠心であり、また民族的造形センスなのであろう。藤村記念堂以降の谷口の和風の作品は ステレオタイプ化したスタイルとしての和風建築ではない。美しいフロシキや古九谷の皿と同様な民族的造形センスが獲得した形式であったのだ。

この本全体に貫かれているのは、一専門分野に溺れ周囲を見失うことのない、谷口の幅広い視野である。人によっては雑学にしか思えないような事柄の中に、デザインについて深く思考する入り口を見つけてしまうスリルが味わえる一冊である。

建築文化 9月号別冊
「谷口吉郎の世界
――モダニズム相対化がひらいた地平」



中庸への意志

Intention to moderation

米津正臣[修士2年]
YONEZU Masaomi (M2)

本書は、1997年の「谷口吉郎展」の開催に合わせて出版されたもので、谷口吉郎の建築作品や業績が体系的にまとめられている。この特集の監修にあたった本学の建築史の教授である藤岡洋保先生は、そのまえがきの中で、今日谷口を振り返る意義を次のように述べている。「谷口吉郎は日本近代の主流にいた建築家ではない。それゆえ、その特異性を丹念に追いかけて行くことから、その逆像として当時の日本の建築の特徴を対比的に浮かび上がらせ、その問題点を指摘することもできる」。さらに「意匠への傾倒――プロポーション世界の可能性」と題する論文では、谷口吉郎の建築あるいは建築論を、日本の近代建築史の中で位置づけるとともに、建築における「意匠」「伝統」あるいは「プロポーション」という言葉の意味を再考する機会を我々に与えてくれている。

筆者は、日本に近代主義建築の潮流が押し寄せてきた時代において、合理性や実用性を重視していた谷口が、シンケルの建築にふれることで通俗的な近代主義建築の限界を認識し、「美」に最高の価値をみるロマン主義的な世界に近づいてゆく過程を追いかけ、谷口が「意匠」をもって、近代主義建築を相対化したことを述べている。ここで筆者は、谷口を「近代建築家」であるとか「和風建築家」であるといったように一義的に断定するのではなく、彼のもつ多面性に注目し、それが創作の手がかりとして積極的に位置づいていたことを評価している。例えば彼が多用する竪格子などにみられる「和風」のモチーフも、ミースが高層建築のカーテンウォールに用いた立面を演出するI 型鋼と同じ意味を読みとり、教条主義的な近代主義建築の時代においても現代日本にふさわしい「意匠」を追求しつづけた現代建築家としての谷口吉郎像を浮かび上がらせる。

筆者がいうように、谷口は教条主義的な近代主義建築の世界を疑問視し、「意匠」のもとで近代主義的な合理性(合目的性)が統合されなくてはならないことを示したかった。そのことによって「近代主義建築を相対化した」といえるかもしれない。しかし世界的に見れば、モダニズムにおいても、美やプロポーションといった概念は決して捨象されていた問題ではない。ル・コルビュジエやミースのように、むしろそれが常に潜在的な欲求となって建築を更新し続けたことを考えれば、その精神において谷口をモダニズムの中心から逸脱した、対立する地点に位置づけるのは適切ではないだろう。さらに「近代主義建築の相対化」と言えばまさにポストモダンであるが、谷口の建築はいわゆるポストモダニズムの建築とは全く違う位相にあるように思える。それゆえ強烈なアンチテーゼということにはならなかったのだが、それでも筆者のいう「谷口は整合性のとれた世界の虚構性、"モダン"であろうとすることの危険性を察知していた。しかし、それに対する代案を彼が提出できているとは考えていなかったために、それに対する批判を差し控えているのである。」という言葉に続けて、私なら次のようにつけ加えてみたい。「そこで谷口がとった戦略は、日本の古典的なもの、民衆的なものの中に、合理的=モダンなものを読みとろうとすることであった。そうすることで、意匠、和風、美という事柄を合理性を批判する対立概念に据えるのではなく、両者が対立しない中庸な地点を探ろうとしたのだ」と。この中庸さこそが、谷口の建築のもつ穏やかさであり、いたずらに合理性への対立をあおったポストモダニズムとの決定的な位相の違いなのだ。このイデオロギー的な対立を前提としない地点に立ち返る谷口の姿勢は、作品としては丹下健三のように一時代を築くことはなかったものの、今まさに私たちに多くの示唆を与えるものとなるように思える。

OB卒業設計再見
Review of alumni's diploma

歴史主義から近代主義へ

From Historicism to Modernism

小川貴司[修士2年] 田口陽子[修士2年]
OGAWA Takashi (M2), TAGUCHI Yoko (M2)

東京工業大学緑が丘一号館二階のとある一室、ここに極めて貴重な資料が保管されている。歴代の卒業設計が収められたマイクロフィルムである。そこには雑誌で名前を目にしたことのある建築家の作品も数多く収められている。こうした資料をこのまま眠らせておく手はない。このコーナーではそうした普段我々が目にすることの少ない、過去の卒業設計を紹介し、当時の学生がどんなことに関心をもって建築に取り組んでいたのかを探ってみようと思う。

第一回目の今回取り上げるのは、大正13年(1924年)から、大正末期(1926年)までの卒業設計である。大正13年といえば、関東大震災が東京を襲った翌年である。構造の教育は大学において特に重要なものとなり、卒業設計にもそうした影響が少なからず現れているのだろうか、それとも、震災とは関係なく、当時の建築教育では常識だったのだろうか、鉄筋の配筋図まで描かれた詳細図も多く見られた(図1)。

当時の卒業設計に対する第一印象は歴史主義である。ドーリックの柱、人体をかたどった彫刻など、歴史的な装飾が施された立面。対称性の強い正面と平面。そのため、こうした建築はホテル、美術館から刑務所、葬儀場、浴場にいたるまで、ビルディングタイプ(用途建築)は実に多彩であるにもかかわらず、図面を見ただけではどの建物も同じに見える。いずれの作品もその図面構成は似通っており、平面図、立面図、断面図がそれぞれ1図面につき1枚が基本となっている。それに加えてギリシャ建築のオーダー図のような入口詳細図を1枚付け加えられている(図2)。この詳細図は極めて緻密なもので、ロットリングすらなかった当時の人が一体どれだけ苦労してこれらの図面を描いたのか、その作画能力には驚嘆するものがある。ファサードのデザインが建築の重要な問題であったことがこうした図面からうかがえる。

もちろん、当時の作品がすべて歴史主義だった訳ではない。数こそ少ないが明らかにそれとは異なる作品群、例えば、明らかにライトの影響をうけているもの(図3)、立面に装飾がなくマッシブな表現のもの(図4)などが見られる。こうしたデザインは卒業設計の中で歴史主義のものに次いで多く、有機的、量塊的と形容できる特異な外観は、当時、東京帝国大学の学生であった堀口捨巳や山田守らにより結成された分離派初期のデザインに見られる表現主義を連想させる。

ところで当時、どの大学でも歴史主義が支配的な状況だったのかというと、どうやらそうではないようである。このころ発行されていた建築雑誌を見てみると、本大学では昭和になるまで一つも現れてこないモダニズムの作品が他大学では優秀作品として掲載されているのである(図5)。どうやらモダニズムに対する意識は他大学に比べて低かったらしい。

次に図面の表現方法を見てみると、外観パース(図6)のような表現は2、3の作品でしか見られなかった。また設計主旨を説明する文章がないのも今と大きく異なるところである。そして、多くはビルディングタイプがそのまま作品タイトルになっている。おそらく、当時は近代の産物である各ビルディングタイプがまだ新鮮なものであったため、卒業設計のテーマになりえたのだろう。ただし、中には例えば「自由への一時束縛所」(留置所)というように、かなり文学的な面白いタイトルも見られた。そして、ほとんどの作品には配置図が描かれておらず、これは建築を設計するにあたって敷地が想定されていないことを示すものである。数にして3年間の卒業設計の中で配置図が見られるのは3つだけであった。また、例えばタイトルが「SEASIDE HOTEL」となっていても、どこにも海が表現されていないような漠然とした敷地しか設定されていないことも多かった。借景として立面に風景が描かれることすら非常に稀なことで、敷地を積極的に表現しているものはほとんどないのである。その代わりに立面は、幾何学的なバックスクリーンを背景にすることが多く見られた(図7)。確かに、歴史的な様式をいかに立面のデザインに施すかが建築の主要な問題であった当時、敷地を想定する必要はあまりなかったのかもしれない。この点、敷地のコンテクストを読みとることに意識を向けることの多い近年の建築とは大きく異なるところではないだろうか。

図1:大正15年 若葉康三「芸術協会設計図」

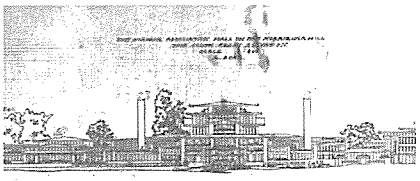


図3:大正15年 道家鉛夫「THE NIRVANA ASSOCIATION HALL ON THE HOKAIZUKA HILL」

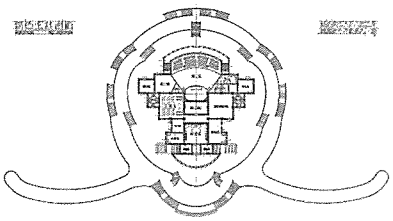


図4:大正14年 斉藤文一郎「讃佛堂設計図」

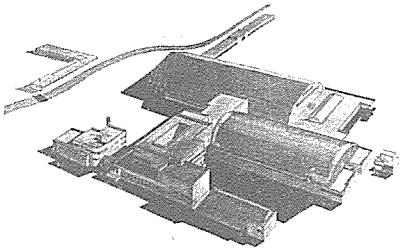


図5:大正15年 山本一夫「Cinema Studio」(東京大学)

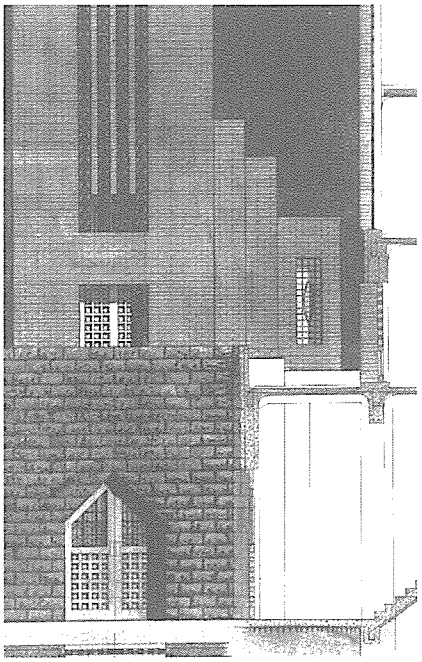


図2:大正13年 池端清一「自由への一時束縛所」

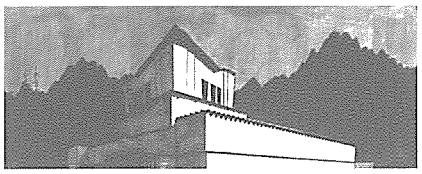


図6:大正15年 小西正夫「山の中腹に建つ礼拝堂の設計」

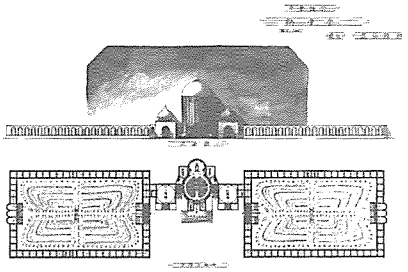


図7:大正15年 武田隆朗「納骨堂」

参考文献:
建築雑誌1924年~1926年、新建築1995年12月臨時増刊 現代建築の軌跡

今回、本誌の編集委員として仙田教授の後を引き継ぐにあたり、編集委員を代表して一言述べさせて頂きます。

大学の建築学科の出す雑誌は、イエールのパースペクタのような建築の理論、またそれに学生の設計作品を加えたAAスクールのものなど様々です。
本誌においては基本的に今までの方向を踏襲するものでありますが、新たに巻頭記事を設ける等、編集の幾分の変更をしております。
ご覧いただいたように、今回の巻頭記事は「谷口作品探訪」と題して谷口吉郎作品の現在を学生に報告してもらっています。
また誌面全体は、この巻頭記事と学生の課題作品、そしてニュース等の3部構成となります。
特に学生の課題は、作品の単なる掲載に留まらず、課題提出された先生方の出題意図や建築に関する意見表明等も含め、
より立体的な編集が出来ればと考えています。
しかし最も強く意図したことは、編集への学生参加です。こうした雑誌はできれば学生自身の編集によって発行できればと考えるところから、
今のところすべてを学生に求めることは無理としても、できるだけ多くの取材・執筆を任せる方向をとりたいと思っております。
本号では部分的ではありますが、設計作品の発表講評会を記録し、報告等もしてもらっております。

以上、TIT建築設計教育研究会の支援のもとで創刊以来7年を越えた本誌を、単に設計教育の報告に留めるだけでなく、
それを越えた本学の建築学科の建築設計に関する機関誌的役割を幾分でも担えるものにできたらと考えております。[坂本一成]

編集：東京工業大学工学部建築学科ka編集委員会
編集委員長=坂本一成
委員=八木幸二/三上貴正/五十嵐規矩夫/塚本由晴[幹事]/小川次郎/寺内美紀子/三村大介
学生編集委員=米津正臣/笠井誉仁/増山絵理奈/川上正倫/服部ひかる/小川一人/田口陽子
編集協力：デザイン=秋山伸+Les sœurs Papin/翻訳=デイヴィッド・スチュアート
表紙：大岡山キャンパスのパノラマ[©塚本由晴]
発行：TIT建築設計教育研究会
定価：800円

ka015

Spring,1998

1.水力実験室　2.70周年記念講堂　3.情報理工校舎　4.西3号館　5.本館　6.百年記念館